OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	西暦9・10世紀のアラビア語地理文献について : 人文地理を中心に (1)
Author(s)	竹田, 新
Citation	大阪外国語大学論集. 2001, 24, p. 191-212
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79851
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪外国語大学論集第24号（2000年）

西暦９・10世紀のアラビア語地理文献について
―人文地理を中心に―（１）

竹　田　　新

On Arabic Geographical Works in the 9th and 10th Centuries (1)

TAKEDA Shin

（Ⅰ）

イスラーム地理学史では、西暦９世紀から10世紀あるいは11世紀までを古典期とする説が有力である[1]。この時期の地理学は、自然地理学においては、「経度と緯度の学」と称される数理・天文地理学が中心であり、他方、人文地理学においては、イスラーム圏に焦点を当てた「諸道と諸国の学」と、非イスラーム圏も同等に扱う「国々の奇事の学」という、共に記述・地誌的地理学とも言うべき分野が２大潮流となり、地理学全体でも主流を占めるに至る[2]。本稿では、こうした人文地理の分野を中心に、この時期―但し西暦10世紀まで―に著された個々の地理書について、主にその内容と特徴、そして後世への影響を紹介することを通して、イスラーム地理学古典期の実態と位置付けを幾分かでも明らかにしてみたい。なお、この時期の地理書に影響を与えた歴史書などにも触れる。

（Ⅱ）

イスラーム以前のアラブ人の地理的知識に関しては、主に文字資料―アラビア語古詩やクルアーンとハディース（聖伝承）など―に拠るところが大きい。古詩には、アラビア半島内の居住地・水場・放牧地・山地などへの言及が見られる[3]。そして、クルアーンとハディースからは、Misr エジプト、Bâbil バビロニア、聖地（パレスチナ）といった近隣地域の名や、バビロニア起源あるいはゾロアスター教やユダヤ・キリスト教系統、そしてアラブ固有の伝統的地理概念、例えば７天７地説、２大海説、大地鳥形説などが、アラブ人の間に知られていたことが分かる[4]。また、後の時代の資料に拠ると、彼らは naw'（或る特定の星が沈むこと）に基づく気象情報など、自然環境をめぐる知識も有していたようだ[5]。

西暦７世紀のイスラーム時代になると、宗教上および軍事・政治上の要求が地理学の確立を促した。すなわち、礼拝時刻や qibla（礼拝の方角）を決めることは後の数理・天文地理学の、メッカ巡礼、各地の征服・統治は後の記述・地誌的地理学の素地となったのである。加えて、イスラーム期に入ってますます盛んになった陸海の通商活動が後者の地理学に養分を与えた[6]。そして、この世紀後半のウマイヤ朝期には、各征服地―東は Khurâsân（現在のイラン北東部）から西は Ifrîqiya（現在のチュニジア地方）まで―の長所を描いた報告 faḍâ'il が

アラビア語で幾つも記され、記述・地誌的地理学の一つの萌芽となった[7]。

次いで８世紀に入ると、イスラーム圏は東は Mâ warâ' an-nahr（トランスオクシアナ）・as-Sind（インダス流域）、西は al-Andalus（イベリア半島）・al-Maghrib（北アフリカ）と３大陸に広がり、ムスリムたちの地理的知識も拡大の一途を辿った。そして、後半のアッバース朝期を迎えると、商業の更なる活性化に伴い、ムスリム商人の活動は、東は中国、北はブルガール（ヴォルガ中流域）、南は東アフリカ沿岸部やサハラ以南にまで及び、彼らからも日々、新しい情報が入ってきた。また、首都 Baghdâd の研究機関 Bayt al-**h**ikma「知恵の館」などを拠点に、サンスクリット語、パフラヴィー語、ギリシア語あるいはシリア語などの諸学術書の翻訳活動が盛んになり、インドの諸 *siddhânta*、イランの *Zîk-î Shahriyârân*、Claudios Ptolemaeus（168年頃没）の *Megale Syntachys tes Astronomica* といった、外来の天文書もアラビア語に訳された[8]。更に、遅くとも次の９世紀前半までには、同じ Ptolemaeus の地理書 *Geographice Hyphegesis* や、おそらく Marinus（130年頃没）の地理書も翻訳され、ササン朝の行政地理書などと共に、これらの天文書と地理書は後のアラビア語地理書の典範として用いられる[9]。

こうして、７前世紀から蓄積されてきたムスリムたちの地理的知識は、外来の知識の摂取・適用によって、体系付けられてゆき、従来の曖昧であった地理概念も、例えば、大地は球体で、宇宙の中心を占めると明確に定義されるようになり、クルアーンやハディースは、どちらかと言えば、地理学の有用性を説く目的や地理をめぐる知識に宗教的裏付けを与える目的で利用されるようになった[10]。そして、地理に関係する本格的な作品も登場し始め、上記の siddhânta（アラビア語で sindhind）や zîk（アラビア語で zîj）を利用した al-Fazârî―Abû Is**h**âq Ibrâhîm b. **H**abîb か、Abû 'Abd Allâh Mu**h**ammad b. Ibrâhîm b. **H**abîb―による *K. az-Zîj*『天文表』（786年以後）などが著されたと伝えられる[11]。

以上の前史的段階を経て、９世紀に入ると、次々と本格的な地理書が生み出され、イスラーム地理学の確立期を迎えることになる。

（Ⅲ）

まず現れたのが、数理・天文地理学に属する 'Ilm al-A**t**wâl wa-'l-'Urû**d**「経度と緯度の学」と呼ばれる分野の著作である。上述した al-Fazârî の作品の後を受けて、Ptolemaeus の天文書・地理書の影響も強くなる中で、al-Khuwârizmî（846年以後没）の *K. **S**ûrat al-ar**d***『大地の姿』がこの分野の最初の本格的な作品として登場する。以後、al-Farghânî（861年以後没）の *K. Jawâmî' 'ilm an-nujûm wa-'l-**h**arakât as-samâwîya*『星と天体運動との学の集成』をはじめ、al-Kindî（874年没）の *K. Rasm al-ma'mûr min al-ar**d***『大地の居住域の描写』、そして al-Battânî（929年没）の *K. az-Zîj a**s-S**âbi'î*『サービア天文表』などが著された。

al-Khuwârizmî、すなわち Khuwârizm ホラズム出身の Abû Ja'far Mu**h**ammad b. Mûsâ は、アッバース朝第７代カリフ al-Ma'mûn（在位813-33年）の時代、Baghdâd の「知恵の館」で活躍し、このカリフに捧げられた世界地図の作成にも加わったと考えられる、数学家・天文家・地理家であり、ヨーロッパでは代数学の父―*K. al-Mukhta**s**ar fî **h**isâb al-jabr wa-'l-muqâbala*『集合と分割の計算に関する要説』（通称、*al-Jabr wa-'l-muqâbala*）を著した―として Algorithmi、Algorithmus というラテン語名で知られている[12]。

彼の地理書『大地の姿』（830年頃）は、現在知られているもの―序文などを欠く―では、居住地域、すなわち赤道以南（赤道～南緯16度25分）・第１ iqlîm「気候帯」（赤道～北緯16度27分）・第２「気候帯」（～北緯24度0分）・第３「気候帯」（～30度22分）・第４「気候帯」（～36度0分）・第５「気候帯」（～41度0分）・第６「気候帯」（～45度0分）・第７「気候帯」（～48度0分）・第７「気候帯」の後方（～63度0分）の各々にある町々の経緯度；同じく各「気候帯」にある山々の始めと終わりの経緯度など；西と北の外海（大西洋北部）、Tanja・Martâniya・Ifrîqiya・Barqa・Misr・ash-Shâm などの海（地中海）、al-Qulzum の海（紅海）と緑・as-Sind・al-Hind・as-Sîn の海（アラビア海～シナ海）と al-Basra の海（ペルシア湾）、すなわち大海（インド洋）、Khuwârizm の海（アラル海）と Jurjân・Tabaristân・ad-Daylam の海（カスピ海）、暗黒の海（大西洋南部）の各々の経緯度を使った形状；西の外海、Tanja・Martâniya・Ifrîqiya・Barqa・ash-Shâm の海、al-Qulzum の海、緑・as-Sind・al-Hind・as-Sîn の海、al-Basra の海、Jurjân・Tabaristân の海の各々にある島々の経緯度を使った形状；諸地方の中央の各経緯度；赤道以南、第１「気候帯」・・・・・・第７「気候帯」の後方の各々にある河川の経緯度を使った形状を記したものとなっている[13]。

この書は本体たる地図に付けた説明書と考えられる。そして、Ptolemaeus の前掲の地理書に依拠したものであるが、新たにイスラーム世界での観測によって得られたデータを取り入れ、地中海の長さなどに修正を加えている。以後、前掲した al-Battânî の書や、Suhrâb（945以後没？）の *K. 'Ajâ'ib al-aqâlîm as-sab'a*『７気候帯の諸奇事』という焼き直しの他、間接的な場合―同じ「気候帯」区分を採用―まで含めると、Ishâq b. al-Husayn（952年以後没）の *K. Âkâm al-marjân fî dhikr al-madâ'in al-mashhûra bi-kull makân*『各地の有名な町々の叙述に関する珊瑚の丘』、al-Muqaddasî（991年以後没）の *K. Ahsan at-taqâsîm fî ma'rifat al-aqâlîm*『諸州の知識に関する最良の区分』、al-Idrîsî（1165年没）の *K. Nuzhat al-mushtâq fî 'khtirâq al-âfâq*『諸国踏破を熱望する者の楽しみ』、Yâqût（1229年没）の *K. Mu'jam al-buldân*『諸国辞典』、Ibn as-Sa'îd（1274年没）の *K. Jughrâfiyâ fî 'l-aqâlîm as-sab'a*『７気候帯に関する地理』、an-Nuwayrî（1332年没）の *K. Nihâyat al-arab fî funûn al-adab*『人文学諸分野における必要の限度』（百科）などに利用されていると考えられる[14]。

al-Farghânî、すなわち Farghâna フェルガナ出身の Abû 'l-'Abbâs Ahmad b. Muhammad b. Kathîr は、861/2年にアッバース朝第10代カリフ al-Mutawakkil（在位847-61年）の命により、ナイル川の水位計設置を監督するため al-Fustât（古カイロ）に派遣されたと伝えられる天文家で、ヨーロッパでは Alfraganus の名で知られている。彼の主著たる天文書『星と天体運動との学の集成』（別名 *K. al-Madkhal ilâ 'ilm hay'at al-aflâk*『天文学入門』）は、Ptolemaeus の前掲の天文書を利用しているが、短くて分かりやすく、ラテン語やヘブライ語にも翻訳され、ヨーロッパでは他のアラビア語の天文書よりも広く用いられた[15]。

この書は30章からなるが、その第８章「大地の面積と居住７気候帯の区分とについて」と第９章「大地における既知の国々と町々との名前、および各気候帯におけるそれらの名前について」で、居住地域を７「気候帯」に分け（第１「気候帯」：北緯12度45分・年間最長時間$12\frac{3}{4}$時間～20度30分・$13\frac{1}{4}$時間、第２「気候帯」：～27度30分・$13\frac{3}{4}$時間、第３「気候帯」：

～33度40分・14$\frac{1}{4}$時間、第４「気候帯」：～39度0分・14$\frac{3}{4}$時間、第５「気候帯」：～43度30分・15$\frac{1}{4}$時間、第６「気候帯」：～47度5分・15$\frac{3}{4}$時間、第７「気候帯」：～50度30分・16$\frac{1}{4}$時間)、その上で各「気候帯」が含む土地や都市を東から西へ列挙する[16]。

その土地・都市の「気候帯」が分かれば、大体の緯度がつかめ、特に礼拝の時刻を知るのに大いに役立ったのである。そのこともあってか、彼の「気候帯」区分と各「気候帯」の包含地点の列挙とは以後、Ibn Rustih（922年以後没）の *K. al-A'lâq an-nafîsa*『貴重な品々』（百科）、al-Hamdânî（945年没）の *K. Sifat jazîrat al-'Arab*『アラビア半島の特質』、Mutahhar al-Maqdisî（966年以後没）の *K. al-Bad' wa-'t-ta'rîkh*『創始と歴史』（百科）をはじめ、Tâhir al-Marwazî（1120年以後没）の *K. Tabâ'i' al-hayawân*『動物の特性』（博物）、Yâqût の前掲書、'Abd al-Wâhid al-Marrâkushî（1224年以後没）の *K. al-Mu'jib fî talkhîs akhbâr al-Maghrib*『マグリブ情報の摘要に関する傑作』（歴史）、al-Qazwînî（1283年没）の *K. Âthâr al-bilâd wa-akhbâr al-'ibâd*『諸国の古跡と信者の情報』、al-Maqrîzî（1442年没）の *K. al-Mawâ'iz wa-'l-i'tibâr fî dhikr al-khitat wa-'l-âthâr*『街区と遺跡の叙述による警告と省察』（地歴）など、地理を扱うアラビア語の作品に盛んに引用あるいは利用された。また、上述の al-Khuwârizmî の「気候帯」区分とは異なる al-Farghânî のこの「気候帯」区分は東方イスラーム世界（エジプト以東）の、Ikhwân as-Safâ'（983年以後活躍）の *Rasâ'il*『書簡集』（百科）、al-Bîrûnî（1050年没）の *K. at-Tafhîm li-awâ'il sinâ'at at-tanjîm*『天文術初歩教科書』と *K. al-Qânûn al-Mas'ûdî*『マスウード天文典』や at-Tûsî（1274年没）編の *K. az-Zîj al-Îlkhânî*『イル汗天文表』（以上、天文）、Abû 'l-Fidâ'（1331年没）の *K. Taqwîm al-buldân*『国々の調査表』などにも見られる[17]。

al-Kindî、すなわちアラビアの Kinda 族の後裔たる Abû Yûsuf Ya'qûb b. Ishâq は、al-'Irâq（下メソポタミア）の al-Kûfa に生まれ、al-Basra と Baghdâd で諸学を学び、アッバース朝カリフ al-Ma'mûn や al-Mu'tasim（第８代、在位833-42年）の宮廷で活躍した大学者（自然哲学者）で、「アラブの哲学者」と称され、ヨーロッパでは Alkindus の名の下に知られる。彼の扱う分野は哲学、政治学、心理学、数学、天文学、占星術、地理学、医学、光学、音楽などの多岐にわたり、作品数はゆうに200を越えるらしい[18]。地理書『大地の居住域の描写』は現在は伝わっていないが、al-Mas'ûdî（957年没）の *K. at-Tanbîh wa-'l-ishrâf*『提言と再考』（地歴）中の言及から推察すると、al-Khuwârizmî の地理書同様、Ptolemaeus の地理書の翻案ではなかったかと考えられる[19]。

また、al-Battânî、すなわち Abû 'Abd Allâh Muhammad b. Jâbir b. Sinân は、al-Jazîra（上メソポタミア）の Harrân のサービア教徒（一種の星辰教徒）の家に生まれ、生涯の殆どを自分の天体観測所のある ar-Raqqa で送った天文学の大家で、ヨーロッパでは Albategnius または Albatenius の名で知られている。彼の主著『サービア天文表』（天文書＋天文表）は877年以降の天体観測の結果に基づいたもので、ラテン語やスペイン語にも翻訳され、イスラーム世界の天文学のみならず、ヨーロッパの天文学の発展にも少なからぬ貢献をした[20]。

この天文書は57章から成り、その第６章には居住地域と、al-Hind の海（インド洋）、Ûqiyânus の海（周海：大西洋）、ar-Rûm と Misr の海（地中海）、Buntus の海（黒海）、Jurjân の海（カスピ海）、大地の３部分：Ûrûfâ ヨーロッパ・Lûbiyâ リビア（アフリカ）・大 Ashiyâ アジアの

描写および町々の経緯度に関する説明がある。更に天文表の部分には『大地の姿』(al-Khuwârizmî の書と同様、Ptolemaeus の地理書の翻訳か)にある94地点の経緯度表と、al-Andalus と al-Maghrib の町々の経緯度表が挙がっている[21]。

これらは Ptolemaeus をベースとしている点では al-Khuwârizmî の地理書と同傾向にあるが、各地の経緯度の値にはかなりの進歩が見られる。また、7「気候帯」区分は al-Khuwârizmî とは異なり、al-Farghânî と同系統のものである。そして、ここに登場してくる zîj（天文表）の主内容の一つは居住地域の主要地点の経緯度の決定とその表示であった。この al-Battânî による第6章の記述は、Ibn Rustih の前掲書、al-Masʿûdî の *K.Murûj adh-dhahab wa-maʿâdin al-jawhar*『黄金の牧場と宝石の鉱山』（地歴）、al-Jayhânî（925年以後没）の *K. al-Masâlik wa-'l-mamâlik*『諸道と諸国』（現在は不明）、Qudâma（948年没）の *K. al-Kharâj wa-**s**anʿat al-kitâba*『租税と書記術』（百科）、Ibn ad-Dawâdârî（1340年没）の *K. Kanz ad-durar wa-jâmiʿ al-ghurar*『真珠の宝庫と精粋の集成』（歴史）などに利用される[22]。

以上の他、星学（占星術と天文学）の諸作品、例えば、Abû Maʿshar（Jaʿfar b. Mu**h**ammad ʿUmar al-Balkhî、886年没、ラテン語名 Albumasar）の *K. al-Madkhal ilâ ʿilm a**h**kâm an-nujûm*『占星術入門』、al-Khuwârizmî の *K. as-Sindhind*『スィンドヒンド』（天文表）、Ya**h**yâ b. Abî Man**s**ûr（Abû ʿAlî Ya**h**yâ b. Abî Man**s**ûr al-Maw**s**ilî、832年没、ラテン語名 Johannes filius Almansoris）の *K. az-Zîj al-mumta**h**an*『実証天文表』や、伝聞になるが、**H**abash al-**H**âsib（A**h**mad b. ʿAbd Allâh al-Marwazî、864年以後没）の *K. az-Zîj al-mumta**h**an*、al-ʿAbbâs b. Saʿîd al-Jawharî（830年頃活躍）や Abû Maʿshar や an-Nayrîzî（Abû 'l-ʿAbbâs al-Fa**d**l b. **H**âtim、923年没、ラテン語名 Anaritius）の天文表なども、「経度と緯度の学」の発展に貢献したと言える[23]。

また、アラビア半島土着の星学、あるいは気象や暦の知識と言ってもよい anwâ'（naw' の複数形で、月の28宿に基づく）をめぐっては、adîb（文人、「教養人文学」者）の Ibn Qutayba（Abû Mu**h**ammad ʿAbd Allâh b. Muslim、889年没）が *K. al-Anwâ'*『アンワー』を著しており、内容は月の28宿、四季、太陽、星々、風、雲・雷・雨などを扱ったものである[24]。伝聞では、この書の種本とも言われる同じく adîb の ad-Dînawarî（Abû **H**anîfa A**h**mad b. Dâwud、895年没）の『アンワー』をはじめ、al-A**s**maʿî（Abû Saʿîd ʿAbd al-Malik b. Qurayb、828年没）や al-Mubarrad（Abû 'l-ʿAbbâs Mu**h**ammad b. Yazîd、899年没）他の言辞学者、Abû Maʿshar や Thâbit b. Qurra（Abû 'l-**H**asan Thâbit b. Qurra b. Zahrûn、902年没）などの星学者、更には後述する Ibn Khurdâdhbih などによる各『アンワー』があったらしく、これらは自然地理書的性格を備えていたと考えられる[25]。加えて、星学者 Mâ Shâ' Allâh b. Sâriya（815年頃まで活躍）にも、*K. al-Am**t**âr wa-'r-riyâ**h***『雨と風』という anwâ' の書に似た作品があった[26]。

最後に、自然地理学におけるその他の分野では、前述した al-Kindî が *K. al-Bi**h**âr wa-'l-madd wa-'l-jazr*『海洋と潮汐』（あるいは *K. al-Madd wa-'l-jazr*『潮汐』）、彼の弟子 as-Sarakhsî（Abû 'l-ʿAbbâs A**h**mad b. a**t**-**T**ayyib、899年没）が *K. Manâfiʿ al-bi**h**âr wa-'l-jibâl wa-'l-anhâr*『海洋と山岳と河川の諸利点』（あるいは *K. Manfaʿat al-jibâl*『山岳の利点』）といった作品を著したと伝えられる[27]。

(Ⅳ)

また、人文的な地理書としては、先ず Ibn al-Kalbî（819年以後没）の *K.al-'Aja'ib al-arba'a*『４奇事集』や al-Jâhiz（868/9年没）の *K.al-Buldân*『国々』など、adab（「教養人文学」）的要素の強いものが現れた。これらに作者不詳（あるいは商人 Sulaymân か）の *Akhbâr as-Sîn wa-'l-Hind*『中国とインドの情報』（851年）といった異国への旅行記も加わって、次第に「国々の奇事の学」なるものが出来上がっていく。次いで、Ibn Khurdâdhbih（885年以後没）の *K. al-Masalik wa-'l-mamâlik*『諸道と諸国』や al-Ya'qûbî（894年以後没）の *K.al-Buldân* が出現し、記述・地誌的地理学の本流となる「諸道と諸国の学」が生まれることになる。

Ibn al-Kalbî と呼ばれる Abû 'l-Mundhir Hishâm b. Muhammad b. as-Sâ'ib は、al-Kûfa で生涯の大半を送り、アッバース朝第３代カリフ al-Mahdî（在位775-85年）の治世には Baghdâd にも住んだ adîb で、その著作は系譜学関係を主に100を越えると伝えられる[28]。そのうち地理書は *K. al-Buldân*、*K. al-Anhâr*『河川』など10点以上はあったらしいが、現在いずれも見つかっておらず、わずかに彼の『４奇事集』と考えられる作品が al-Idrîsî の前掲書に引用され、その実在を窺わせるだけである[29]。

al-Jâhiz（"ぎょろ目の者"）のあだ名で知られる Abû 'Uthmân 'Amr b. Bahr al-Fuqaymî は al-Basra に生まれ、アッバース朝第７代カリフ al-Ma'mûn の治世以後、主に首都の Baghdâd と Surra man ra'â（Baghdâd よりも北にある、836-92年の首都サーマッラー）とで活躍し、アラビア語散文学を確立した adîb かつ思想家である。非常な健筆家で、後の博物学・民俗学の基礎となった *K. al-Hayawân*『動物』の他、約200点の著作があったと言われる[30]。

彼の地理書『国々』（862年、別名、*K. al-Amsâr wa-'ajâ'ib al-buldân*『諸都市と、国々の奇事』他）は断片的にしか伝わっていないが、大英博物館所蔵の写本などによると、Quraysh 族・聖殿・Abû Tâlib 家など（すなわち Makka メッカ）、al-Madîna メディナ、Misr［と al-Maghrib］、al-Ahwâz、al-Kûfa（Dijla ティグリスにも言及）、al-Basra、al-Hîra の各記述（特色）となっている[31]。原本の書はその他、ash-Shâm シリアや al-Yaman イエメンなどの記事も含んでいたと考えられる[32]。これらの内容はウマイヤ朝時代に盛んに記された fadâ'il・khasâ'is（各征服地の長所・特色を描写した報告）の延長線上にあり、この書はいわば、アラビアを含めた各地の khasâ'is 集である。とは言え、adab の地理学としての「国々の奇事の学」を事実上生み出し、この特徴を継承した Ibn al-Faqîh（903年以後没）の *K. al-Buldân* や al-Mas'ûdî の『黄金の牧場と宝石の鉱山』に多大な影響を与えたばかりでなく、Ibn Khurdâdhbih の前掲書、前記の Ibn Qutayba の *K. 'Uyûn al-akhbâr*『情報の泉』（adab）、Ibn Rustih と Qudâma の両前掲書、al-Mas'ûdî の『提言と再考』、Ibn Hawqal（977年以後没）の *K. Sûrat al-ard*、al-Muqaddasî の前掲書を始め、ath-Tha'âlibî（1038年没）の *K. Latâ'if al-ma'ârif*『知識の小話』（adab）、［al-Bakrî（1094年没）の *K. al-Masâlik wa-'l-mamâlik*］、Ibn 'Asâkir（1176年没）の *K. Ta'rîkh madînat Dimashq*『ダマスカス史』（歴史）、Yâqût の前掲書、［Sibt b. al-Jawzî（1256年没）の *K. Mir'ât az-zamân fî ta'rîkh al-a'yân*『名士たちの歴史に関する時代の鏡』（歴史）］、al-Watwât（1318年没）の *K. Mabâhij al-fikr wa-manâhij al-'ibar*『思考の喜悦と考慮の方法』（百科）、an-Nuwayrî の前掲書などにも、その記述が引用・利用されている有名な書である[33]。

その他、Yazdijird b. Mihîndâdh（あるいは Mihbindâd、あるいは Mihmindâr）al-Kisrawî（9世紀末活躍？）の *K. Fadâ'il Baghdâd wa-sifat-hâ*『バグダードの長所と特質』—Ibn al-Faqîh・Yâqût の前掲書が利用—、前記の as-Sarakhsî の *K. Fadâ'il Baghdâd wa-akhbâr-hâ*『バグダードの長所と歴史』—Ibn al-Faqîh の前掲書が利用—、'Umar b. Shabba（Abû Zayd, Ibn 'Ubayda b. Zayd al-Basrî、876年没）の *K. Fadâ'il al-Basra*『バスラの長所』、Ibn Tammâm ad-Dihqân（Abû 'l-Hasan Muhammad b. 'Alî）の *K. Fadâ'il al-Kûfa*『クーファの長所』といった、fadâ'il 書も著されたらしい[34]。

次に、インド洋の商人 Sulaymân の作ともされる『中国とインドの情報』は大凡、as-Sîn 中国への海路、al-Hind インドの王たち、as-Sîn の人たちの風習、al-Hind の人たちの風俗、as-Sîn と al-Hind のその他の情報から成っており、〔Fâris（イラン南西部）の〕Sîrâf・'Umân オマーンの Masqat—al-Hind の Kûlam Malay（西海岸の Quilon）—Lanjabâlûs ニコバル島—az-Zâbaj（シュリヴィジャヤ王国）の Kalah-bâr（マレー半島西海岸の Kedah？）—Sanf（チャンパ王国）—as-Sîn の Khânfû 広州という航路とその途中の諸所を説明している[35]。

この作品は、船乗りや商人のための一種の案内書であることを窺わせるが、特に中国（唐）に関する銅銭、茶、通行手形、蕃長、画指、募兵制などの正確な記述や、as-Sîlâ 新羅の記事といった貴重な情報を含んでおり、[Ibn Khurdâdhbih]・al-Ya'qûbî・Ibn al-Faqîh・Ibn Rustih の前掲書、al-Mas'ûdî の『黄金の牧場と宝石の鉱山』、著者不祥（Ibrâhîm b. Wasîf Shâh？）の *K. Mukhtasar al-'ajâ'ib*『諸奇事の要約』（1000年頃）、Tâhir al-Marwazî・al-Idrîsî の前掲書、al-Qazwînî の *K. 'Ajâ'ib al-makhlûqât wa-gharâ'ib al-mawjûdât*『被造物の諸奇事と存在物の諸珍事』、Ibn al-Wardî（1457年没）の *K. Kharîda al-'ajâ'ib wa-farîda al-gharâ'ib*『諸奇事の純真珠と諸珍事の貴真珠』などに引用・利用されている[36]。

海路の旅行記には、al-Andalus の後ウマイヤ朝の廷臣で詩人の Yahyâ b. al-Hakam al-Ghazâl（864年没）の手になる al-Majûs（ノルマン人）王宮の訪問記録もあるらしい。これは Ibn Dihya（Abû 'l-Khattâb 'Umar b. al-Hasan、1235年没）の *K. al-Mutrib min ash'âr ahl al-Maghrib*『マグリブ人の詩の傑作』に記されており、ヴァイキングが844年にイベリア半島南部を襲った後、845年11月に、Yahyâ al-Ghazâl は後ウマイヤ朝第4代イマームの 'Abd ar-Rahmân 2世（在位822-52年）の使節団の一員として、Shilb スィルヴェス（現ポルトガル領）から船出し、al-Majûs の大きな島（ユトランドかアイルランド？）にある王宮を訪れ、20か月ぶりに Qurtuba コルドバに帰り着いたという[37]。

陸路の旅行記としては、アッバース朝第9代カリフ al-Wâthiq（在位842-47年）の命で通弁 Sallâm なる者が"Yâjûj ゴグ・Mâjûj マゴグの堰"（クルアーンに登場し、東の果てにあるとされた）の探索を行なった記録があったと言われる。Ibn Khurdâdhbih、Ibn Rustih、al-Muqaddasî を始め、al-Idrîsî、Yâqût の各前掲書、al-Qazwînî の『諸国の古跡と信者の情報』、an-Nuwayrî の前掲書などに再録されたものに拠ると、Sallâm は Surra man ra'â から Armîniya アルメニアを経由して al-Khazar ハザルの地（カスピ海沿岸）に至り、更に東進しておそらくバルハシ湖まで達したようであり、足掛け28ケ月に及ぶ旅であったらしい[38]。

その他、アッバース朝の宰相、Yahyâ b. Khâlid al-Barmakî（在位786-803年）が al-Hind へか

の地の情報を得るために送った調査団による報告書（800年頃か）は、Ibn Khurdâdhbih・al-Jayhânî・Mutahhar Maqdisî・Tâhir al-Marwazî・al-Idrîsî の前掲書などに利用された、インドに関するムスリム側から見た最初の全般的な報告であったと言われる[39]。更には、ar-Rûm（東ローマ）の捕虜から解放された Muslim b. Abî Muslim al-Jarmî（あるいは al-Huzmî）が、ar-Rûm に関する諸作品を著した（845年以後）と伝えられ、al-Mas'ûdî の『提言と再考』の他、Ibn Khurdâdhbih や Qudâma の前掲書にも利用された可能性があり、ビザンツ帝国に関するムスリムたちの知識の主要源であったと考えられる[40]。

Ibn Khurdâdhbih（あるいは Ibn Khurradâdhbih）の名で知られる Abû 'l-Qâsim 'Ubayd Allâh b. 'Abd Allâh は Khurâsân に生まれ、Baghdâd で教育を受けてアッバース朝の官吏となり、al-Jibâl（メディア）の駅逓局長などを歴任し、第15代カリフ al-Mu'tamid（在位870-92年）のサロンで活躍した文人でもある[41]。

彼の地理書『諸道と諸国』（初稿846年頃、再稿885年頃）は、現在知られている範囲（要約本とされるもの）では、第１部が大地の特質と各地住民の qibla、第２部が as-Sawâd（下メソポタミア＝ al-'Irâq）地方の行政区分と租税など、第３部が al-Mashriq［東方］に関して、平安の都（Baghdâd）―Marw メルヴ―Khurâsân の果て、Sûq al-Ahwâz―Shîrâz―Sijistân、その他の諸街道と、al-Jabal（＝ al-Jibâl）・Khurâsân・〔Mâ warâ' an-nahr〕・al-Ahwâz・Fâris・Kirmân・Sijistân・as-Sind 各地方の行政区分と租税など、al-Basra― 'Adan、al-Basra―al-Hind・as-Sind の両海路と、al-Hind・as-Sîn など東海諸地方の風習・物産、第４部が al-Maghrib［西方］に関して、平安の都―ar-Raqqa―al-Fustât―al-Maghrib、その他の諸街道と、〔al-Jazîra〕・〔ash-Shâm〕・Misr・al-Maghrib 各地方の行政区分と租税など、Tarsûs―Qustantînîya コンスタンティノープルの海峡への道と、ar-Rûm の諸事情、第５部が al-Jarbî［北方］に関して、Âdharbayjân アゼルバイジャン・Armîniya への街道と、両地方の行政区分・租税など、第６部が at-Tayman［南方］に関して、平安の都―al-Madîna・Makka―al-Yaman への道および各地から Makka への道と、〔アラビア半島〕の行政区分など、第７部（付録？）が非ムスリム商人の路や、各種の 'ajâ'ib（奇事）など、を記している[42]。

この書はアッバース家の依頼により、官庁の公文書を利用して、駅逓官としての必要な知識をまとめた便覧と言えよう。大半が Baghdâd から４方に通じる街道の行程と、各地方の地名および租税額の列挙であるが、書の最後（再稿において？）に Ibn al-Kalbî や al-Jâhiz ほかに拠った 'ajâ'ib を付加している[43]。第１部の大地の特質の記述はギリシア系統のコスモグラフィーの典型で、以後の地理関係の文献にも同様のものがしばしば現れる。また、４方別の記述はササン朝の行政地理書の影響を受けたものと考えられる[44]。アッバース朝領内の駅逓・辺境・租税という行政の３テーマに関する詳しい情報だけでなく、インドのカーストや、東ローマの行政区画ほかの諸制度といった貴重な情報も多く含んでおり、al-Yahûd（ユダヤ教徒）ar-Râdhânîya 商人と ar-Rûs（スカンディナビア系あるいは東スラブ系）商人との路の記述は、特に注目されている[45]。

Ibn Khurdâdhbih の地理書はその単純さにもかかわらず、完本も対象に含めると、[al-Ya'qûbî]・Ibn al-Faqîh・Ibn Rustih・al-Jayhânî・al-Mas'ûdî・Ishâq b. al-Husayn・Ibn Hawqal・

al-Muqaddasî の各前掲書をはじめ、*Mukhtasar al-'ajâ'ib*、al-Bîrûnî の *K. al-Âthâr al-bâqiya 'an al-qurûn al-khâliya*『過ぎし世紀の残跡』（歴史）、[al-Bakrî]・[Tâhir al-Marwazî]・al-Idrîsî・Yâqût・al-Marrâkishî・Sibt b. al-Jawzî・al-Watwât・Abû 'l-Fidâ'・Ibn ad-Dawâdârî の各前掲書、Ibn Khaldûn（1406年没）の *K. al-'Ibar wa-dîwân al-mubtada' wa-'l-khabar fî ayyâm al-'Arab wa-'l- 'Ajam wa-'l-Barbar wa-man 'âsara-hum min dhawî as-sultân al-akbar*『省察すべき実例の書、アラブ人、ペルシア人、ベルベル人および彼らと同時代の偉大な支配者たちの初期と後期の歴史に関する集成』（歴史）、al-Qalqashandî（1418年没）の *K. Subh al-a'shâ fî sinâ'at al-inshâ'*『作文術における夜盲の朝』（百科）、al-Maqrîzî の前掲書などに利用・引用されることになる[46]。

なお、*al-Masâlik wa-'l-mamâlik* という題名を持つ地理書は Ibn Khurdâdhbih と相前後して、Ahmad b. al-Hârith b. al-Mubârak al-Khazzâz（870年以後没）や、Abû 'l-'Abbâs Ja'far b. Ahmad al-Marwazî（887年頃没）、前記の as-Sarakhsî—al-Mas'ûdî の『提言と再考』や Yâqût？が利用した—によって著されたと伝えられるが、いずれも現在は知られておらず、内容も不明である[47]。現状では、「諸道と諸国の学」は先ず Ibn Khurdâdhbih により、行政官の地理学として出発したと言ってよかろう。

また、al-Ya'qûbî の名で知られる Abû 'l-'Abbâs Ahmad b. {Abî} Ya'qûb b. Ja'far b. Wahb b. Wâdih は Baghdâd に生まれ、青年期を Armîniya と Khurâsân で送り、al-Hind と ash-Shâm を訪れた後、Misr と al-Maghrib に長期間滞在し、トゥールーン朝の庇護を受けた歴史家・地理家であり、書記を職業としていたと思われるが、シーア派を信奉していたと言われる[48]。

彼の地理書『国々』（889年頃）は、現在、不完全なものしか知られていないが、「若い盛りに地理学に関心を持ち、各地の人にその耕作物、住民の人種、飲料水、衣服、教義、支配者、その地の広さ、隣接地を尋ね、信頼の置ける人が語るところを書き留めた・・・・・・諸都市と諸地区の名、住民と支配層の名、各都市の距離、その土地を征服したイスラーム軍の武将名とその時期、その土地の租税高、平地・山地などの地形、気候、水を叙述した」という序文に続き、第1部は Baghdâd と Surra man ra'â の長所と建設史および町の全貌；第2部は東方（実際は東北）：Baghdâd から al-Jabal（al-Jibâl）、Âdharbayjân、Tabaristân・Jurjân、Khurâsân、Sijistân、Kirmân、〔Mâ warâ' an-nahr〕の諸都市への行程および Isbahân・Naysâbûr ニシャプール・Marw・Balkh ほか主要都市の征服者・人種・地租など、Sijistân・Khurâsân の歴代の統治者；第3部は al-Qiblî［南方］（西南）：Baghdâd から al-Madîna・Makka・al-Yaman への道程と、al-Kûfa の各封土、al-Madîna の水資源、Makka の山・狭路・聖モスクの大きさ・属地、など；第4部は北方（東南と北）：Baghdâd から al-Basra ・・・・・・［al-Yamâma・al-Bahrayn・'Umân（いずれもアラビア東部）・al-Ahwâz・Fâris・as-Sind の諸都市への行程および主要都市の諸事情と、おそらく Armîniya 他北方の記事が欠落］；第5部は西方（西北）：ar-Rûm の諸事情、Halab アレッポから［ash-Shâm］、Misr、al-Maghrib 各地への道程および Hims ホモス・Dimashq ダマスカス・al-Urdunn ヨルダン・Filastîn パレスチナ各軍区の諸地方・人種・征服者・地租など、Misr の諸地方・征服者・地租・金鉱など、Misr から Makka への道、Barqa キレナイカ・al-Qayrawân 他の人種・征服者など、al-Andalus の諸都市とその人種、al-Maghrib の諸王

国と都市；となっている[49]。

al-'Irâq と Baghdâd・Surra man ra'â を中心に据え（彼自身の言葉を借りれば、al-'Irâq は「大地の臍」すなわち中心で、Baghdâd はその al-'Irâq の中心である）、４方別に街道と地誌を扱っている点で、Ibn Khurdâdhbih の作品と同傾向にある。しかし、al-Ya'qûbî は道程などを地誌の中に巧みに組み入れて、Ibn Khurdâdhbih の羅列を主とした無味乾燥な記述とは大きな隔たりを見せる。また、Ibn Khurdâdhbih と異なり、なるべく記述をイスラーム圏に留めおこうとしたように見える他、政治面の記述が優れている。そして、Baghdâd と Surra man ra'â の詳細な都市景観の説明に加えて、ar-Rûs（ここではノルマン人）が844年に al-Andalus へ襲来したという記事や、ファーティマ朝勃興前夜の al-Maghrib の情況描写などは、特に貴重なものである。

この『国々』の書は自らの旅行による資料に基づいて著されており、地誌として体系立っていることと相俟って、10世紀の「諸道と諸国の学」の代表 Balkhî 学派の諸作品、すなわち al-Balkhî（934年没）の *K. Suwar al-aqâlîm*『諸州の姿』、al-Istakhrî（951年没）の *K. al-Masâlik wa-'l-mamâlik*（別名、*K. Masâlik al-mamâlik*『諸国の諸道』）、Ibn Hawqal と al-Muqaddasî の前掲書の先鞭をつけたものと言えよう[50]。そして Ibn al-Faqîh と Ishâq b. al-Husayn の前掲書、al-Muhallabî の *K. al-Masâlik wa-'l-mamâlik*、al-Khatîb al-Baghdâdî（1070年没）の *K. Ta'rîkh Baghdâd*『バグダード史』（歴史）、al-Bakrî の前掲書と *K. Mu'jam mâ'sta'jam*『難読地名辞典』、al-Idrîsî の前掲書、ash-Sharîshî（1222年没）の *K. Sharh al-maqâmât al-Harîrîya*『ハリーリーのマカーマートの解説』（文学）、Yâqût の前掲書、al-Qazwînî の『諸国の古跡と信徒の情報』、al-Watwât の前掲書、ad-Dimashqî（1327年没）の *K. Nukhbat ad-dahr fî 'ajâ'ib al-barr wa-'l-bahr*『陸と海との奇事に関する時代の精髄』、Ibn Shaddâd（1285年没）の *K.al-A'lâq al-khatîra fî dhikr umarâ' ash-Sha'm wa-'l-Jazîra*『シリアとジャズィーラの君主たちに関する極めて貴重な記述』（歴史）、Abû 'l-Fidâ'・[an-Nuwayrî]・al-Qalqashandî・al-Maqrîzî・Ibn al-Wardî の前掲書、Ibn Taghrî Birdî（1469年没）の *K. an-Nujûm az-zâhira fî mulûk Misr wa-'l-Qâhira*『エジプトとカイロの王者たちに関する輝く星々』（歴史）、[Ibn ash-Shihna（1485年没）の *K. Ta'rîkh Halab*『アレッポ史』（歴史）]、al-Himyarî（1494年没）の *K.ar-Rawd al-mi'târ fî khabar al-aqtâr*『国々の情報に関する香しい庭園』などに引用・利用されている[51]。

ちなみに、Ahmad b. Abî 'Abd Allâh Muhammad al-Barqî（887年頃没）も al-Ya'qûbî より前に *K. al-Buldân* という作品を著したようであり、また、前記の ad-Dînawarî にも同名の作品があるらしいが、いずれも内容は不明である[52]。

なお、*K. al-Manâsik wa-amâkin turuq al-hajj wa-ma'âlim al-Jazîra*『{巡礼} 諸儀礼および、巡礼道の諸地点と {アラビア} 半島の諸標識』という案内書も、この世紀の作品、すなわち、al-Harbî（898年没）によって著されたものだと言われる[53]。

al-Harbî の名で知られる Abû Ishâq Ibrâhîm b. Ishâq b. Ibrâhîm b. Bashîr は Baghdâd に生まれ、当地で活躍した、ハディースや言語に精通した法学者であるが、この巡礼案内書は、現在知られている範囲では、・・・や al-Qâ'から al-Madîna と Makka へ至る道；al-Madîna と、そこにある諸遺跡；{巡礼} 諸儀礼と、al-Madîna と Makka 間の道；Makka と、そこにある諸遺

跡；Fayd から al-Madîna へ至る道；Zubâla へ至る as-Salmân 道；Jazîrat al-'Arab と、その諸地域すなわち Najd と Tihâma と al-Hijâz の記述；Baghdâd と al-Kûfa からの Makka・al-Madîna 道の宿場に関する詩歌；al-Basra 道とその水場；al-Basra からの宿場とその minbar（説教段、ここでは説教段を有するモスクの意）の数；al-Basra 道に関する詩歌；Makka へ至る al-Yaman 道や Hadramawt 道や Misr 道や ash-Shâm 道など；Tabûk 道にある預言者（ムハンマド）の諸モスク；al-Kûfa からの本道上にある諸 barîd（駅）の命名；となっており、少なくとも、al-Bakrî の両前掲書などに引用・利用される[54]。

その他、この 9 世紀には、'Arrâm b.al-Asbagh as-Sulamî（888/9年没）の *K.Asmâ' jibâl Tihâma wa-sukkân-hâ*『ティハーマの山々とその住民の名前』—al-Bakrî の『難読地名辞典』や Yâqût の前掲書などが利用—をはじめ、伝聞だが、前述した Ibn al-Kalbî が著した *K. Ishtiqâq al-buldân*『国々の語源』—Yâqût の前掲書が利用—、前記の al-Asma'î による *K. Jazîrat al-'Arab*『アラビア半島』—同じく Yâqût の前掲書が利用—や *K. Miyâh al-'Arab*『アラブの諸水』といった、アラビア半島をめぐる一種の地名辞典も著されたが、同じく伝聞の、Abû 'Ubayda Ma'mar b. al-Muthannâ at-Taymî（825年没）の *K. Makka wa-'l-Haram*『メッカと聖域』と *K. al-Harrât*『溶岩』、Abû Zayd Sa'îd b. Aws al-Ansârî（830年没）の *K. al-Miyâh*『諸水』、Abû 'Uthmân Sa'dân b. al-Mubârak（830年頃没）の *K. al-Ardayn wa-'l-miyâh wa-'l-jibâl wa-'l-bihâr*『両地と諸水と山岳と海洋』、Abû 'Amr Shamr b. Hamdawayh al-Harawî（868年没）の *K. al-Jibâl wa-'l-awdiya*『山岳とワジ』、Abû Sa'îd al-Hasan b. al-Husayn as-Sukkarî（888/9年没）の *K. al-Manâhil wa-'l-qurâ*（あるいは *quwwâ*）『水源と町村（あるいは荒野）』なども、この種の作品であった可能性が高い[55]。

また、al-Jâhiz 作とされることの多い *K. at-Tabassur bi-'t-tijâra*『商業の観察』は、金銀、真珠、宝石、香料、布地、猛禽に関する、種々の最上品やその産地などを記すと共に、al-Hind、as-Sîn、ar-Rûm、そしてイスラーム圏各地の特産品も列挙している、経済地理書的性格を持った作品であり、ath-Tha'âlibî の『知識の小話』などに利用されている[56]。

加えて、al-Azdî すなわち Abû Ismâ'îl Muhammad b. 'Abd Allâh（805年頃活躍）の *K. Futûh ash-Shâm*『シリア征服史』、Ibn Zabbâla（Muhammad b. al-Hasan）の *K. Akhbâr al-Madîna*『メディナ史』（814年執筆）—Ibn Rustih の前掲書などが利用—、Ibn A'tham al-Kûfî（Abû Muhammad Ahmad）の *K.al-Futûh*『征服史』（819年執筆）、al-Wâqidî すなわち Abû 'Abd Allâh Muhammad b. 'Umar（823年没）の *K. al-Maghâzî*『戦勝記』、al-Azraqî すなわち Abû 'l-Walîd Muhammad b. 'Abd Allâh b. Ahmad（858年頃没）の *K. Akhbâr Makka*『メッカ史』—Ibn Rustih の前掲書などが利用—、Ibn 'Abd al-Hakam の名で知られる Abû 'l-Qâsim 'Abd ar-Rahmân b. 'Abd Allâh（871年没）の *K. Futûh Misr wa-akhbâr-hâ*『エジプト征服史』—al-Bakrî の『諸道と諸国』などが利用—、前記の 'Umar b. Shabba による *K.Akhbâr*（あるいは *Ta'rîkh*）*al-Madîna*『メディナ史』、前述した al-Ya'qûbî の *K. Ta'rîkh*（873年頃執筆）、al-Fâkihî すなわち Abû 'Abd Allâh Muhammad b. Ishâq b. al-'Abbâs（885年頃没）の *K. Akhbâr*（あるいは *Ta'rîkh*）*Makka*『メッカ史』、al-Balâdhurî すなわち Abû 'l-'Abbâs（あるいは Abû Ja'far あるいは Abû 'l-Hasan）Ahmad b. Yahyâ b. Jâbir（892年没）の *K. Futûh al-buldân*『諸国征服史』—Ibn al-Faqîh の前掲

書などが利用―、Ibn Abî Tâhir Tayfûr（Abû 'l-Fadl Ahmad、893年没）の *K. [Ta' rîkh] Baghdâd*『バグダード史』―al-Mas'ûdî の『黄金の牧場と宝石の鉱山』や al-Bakrî の『諸道と諸国』などが利用―、Bahshal の名で知られる Abû 'l-Hasan Aslam b. Sahl ar-Razzâz（905年没）の *K. Ta'rîkh Wâsit*『ワースィト史』といった歴史書、更には、Ibn Qutayba の『情報の泉』―Ibn al-Faqîh の前掲書などが利用―や *K. al-Ma'ârif*『知識』（adab）―Ibn Rustih の前掲書や al-Mas'ûdî の『黄金の牧場と宝石の鉱山』などが利用―、前述した al-Jâhiz の『動物』―Ibn al-Faqîh・Ibn Rustih ？の前掲書などが利用―も地誌的記述が豊かで、イスラーム記述的地理学の一端を担っている[57]。

最後に、民俗誌の大家 Abû 'l-Hasan an-Nadr b. Shumayl al-Mâzinî（819年頃没）の *K. as-Sifât*『諸特質』は、遊牧生活に関する百科全書と言われるが、これは自然・人文地理に跨がる作品だったのではなかろうか[58]。

註

以下、和文以外は、著（編）者名、書（論文）名、出版元名を除いて、英文表記を採用。

（１）Sayyid Maqbul Ahmad, *A History of Arab-Islamic Geography*, Amman: Al al-Bayt University, 1995, p. xxiv; Ignaty Yulianovich Krachkovsky, *Arabskaya Geograficheskaya Literatura*, Moscow-Leningrad: Ak. Nauk SSSR, 1957, p. 17。cf. S. M. Ziauddin Alavi, *Arab Geography in the Ninth and Tenth Centuries*, Aligarh: Aligarh Muslim University, 1965; André Miquel, *La géographie humaine du monde musulman jusqu'au milieu du 11e siècle*, vol. I, Paris-The Hague: Mouton, 1967。

（２）古典ギリシア期に見られた数理地理学（Ptolemaeus など）と記述地理（Storabon など）との大別に近いかも知れない。

（３）an-Nâbigha adh-Dhubyânî（600年没）は或る詩でユーフラテス川 al-Furât を歌い、別の詩ではトルコ人 at-Turk とイラン人 al-'Ajam に加えてカーブル Kâbul にも言及している［Pier Giovanni Donini, *Arab Travelers and Geographers*, London: Immel, 1991, pp. 13~14］。

（４）聖地（パレスチナ）はクルアーン5章23節、エジプト Misr は10章87節，12章21節，12章99節，43章51節、バビロン Bâbil は2章102節。そして、７天７地説はクルアーン65章12節、２大海説はクルアーン25章53節。また、大地鳥形説は、通例では 'Abd Allâh b. 'Amr b. al-'Âs（692年以前没）に帰せられる［Ibn al-Faqîh（&'Alî ash-Shayzarî），(*Mukhtasar*) *Kitâb al-Buldân*, ed. M. J. de Goeje, Lugduni-Batavorum, Bibliotheca Geographorum Arabicorum（以下、BGA と略記），vol. V, 1885, pp 3~4; Ibn 'Abd al-Hakam, *K. Futûh Misr wa-akhbâr-hâ*, ed. Charles C. Torrey, New Haven, 1922, p. 1］が、元来は西セムに見られる考えだとする見解がある［A. J. Wensinck, *Tree and Bird as Cosmological Symbols in Western Asia*, Amsterdam, 1921, p. 37］。

（５）その後、黄道の28宿と結び付いた暦法になっていく。また、naw' という語自体がしばしば、雨を指すために用いられ、後には、海上の嵐の意味も獲得する。なお、預言者ムハンマドは特定の anwâ' や星によって雨がもたらされるのだという非ムスリムアラブ人たちの信心を非難したというハディースもある［P. Donini, 前掲書, p. 17］。

（６）ちなみに、イスラーム初期の有名な旅行伝説には、al-Mas'ûdî［*Murûj adh-dhahab wa-ma'âdin al-jawhar*, ed. Charles Pellat, Beirut: al-Jâmi'at al-Lubnânîya（以下、この版を *Murûj* と略記），vol. II, 1966, pp. 372~73］が記す、Tamîm ad-Dârî（661年頃没）が地中海の孤島で Dajjâl（偽キリスト）と Jassâs（終末の怪獣）を見た話や、ad-Dînawarî［*K. al-Akhbâr at-tiwâl*, ed. Vladimir Girgas & Ignaty Krachkovsky, Beirut: Dâr al-Kitâb al-Jadîd, 1970, pp. 21~22］や Ibn al-Faqîh［BGA, V, pp. 140~43］が伝える、'Ibâda b. as-Sâmit（654年没）がコンスタンティノープルの王宮でアダム以下ムハンマド

やイエスに至る像の入った箱を見た話などがある。

（7） Krachkovsky, 前掲書 pp. 58~60。al-Mas'ûdî [*Murûj*, Ⅱ, p. 179] に拠ると、al-'Irâq（下メソポタミア）、ash-Shâm（シリア）、エジプトなどがムスリムの征服するところとなった時、カリフ 'Umar b. al-Khattâb が或る学者に手紙を書き、諸征服地の都市、空気、住地、環境を記述するよう命じたとあり、その後 [*Murûj*, Ⅱ, pp. 180~83] には、この学者による、シリア、エジプト、al-Yaman イエメン、al-Hijâz、al-'Irâq、al-Jibâl（メディア）、Khurâsân、Fâris、Khûzistân、al-Jazîra（上メソポタミア）の各特徴の描写が示されており、fadâ'il の原型を惹起させる内容となっている。

（8） Ibn an-Nadîm [*Kitâb al-Fihrist*, ed. Gustav Flügel, vol. Ⅰ, Leipzig, 1871（以下、書名を省略し、Ibn an-Nadîm とだけ表記）, p. 242] に従えば、ウマイヤ朝カリフ Yazîd（在位680~83年）の子 Khâlid（704年没）がエジプトに住んでいたギリシア人哲学者たちの一団を召して、（錬金/占星 ?）術の諸書をギリシア語・コプト語からアラビア語に訳すように命じたのが、イスラームにおける最初の翻訳活動であったようだ。735年過ぎ（738年頃）には as-Sind においてサンスクリット語の天文書（Brahmagupta の *Khandakhâdyaka* か）がアラビア語に *Zîj al-Arkand* として訳され、773年には as-Sind から使節がカリフ al-Mansûr の宮殿を訪れ、その結果、*Mahâsiddhânta*（Brahmagupta の *Brâhmasphutasiddhânta* か）が或るインド人学者と al-Fazârî（Muhammad b. Ibrâhîm al-Fazârî か）とによってサンスクリット語からアラビア語に訳された [D. Pingree, "'Ilm al-Hay' a", *The Encyclopaedia of Islam*, New Edition（以下、*EI*²と略記）, vol. Ⅲ, Leiden : E. J. Brill, and London : Luzac & Co., 1971, p. 1136 ; D. Pingree, "Sindhind", *EI*², vol. IX, Leiden : E. J. Brill, 1997, p. 640 ; J. F. P. Hopkins, "Geographical and navigational literature", *Religion, learning and science in the 'Abbasid period*, ed. M. J. L. Young, et al., Cambridge : Cambridge University Press, 1990, p. 302 ; *Murûj*, vol. Ⅰ, 1966, p. 85 ; Ibn al-Qiftî, *Ta'rîkh al-hukamâ'*, ed. Julius Lippert, Leipzig, 1903（以下、書名は省略して、Ibn al-Qiftî とだけ表記）, p. 270]。また、Yazdijird 3 世下の天文表 *Zîk-i Shahriyârân* が at-Tamîmî (Abû 'l-Hasan 'Alî b. Ziyâd) によって *Zîj ash-Shâh* としてアラビア語に訳された [D. Pingree, "'Ilm al-Hay'a", *EI*², Ⅲ, p. 1136 ; Ibn an-Nadîm, p. 244]。そして、Ptolemaeus の天文書は、Ibn an-Nadîm [pp. 267~68] に従えば、アッバース朝の宰相バルマク家の Yahyâ b. Khâlid（宰相位786~803年）の命でなされた翻訳が最初であり、その後、an-Nayrîzî（922/3年没）と Ishâq b. Hunayn（910年没）とがそれぞれ翻訳し、いずれも Thâbit b. Qurra（901年没）が改定したが、前者の改定の方が優れているそうだ。また、al-Hajjâj b. Yûsuf b. Matar（9 世紀前半活躍）の翻訳もあり [Ibn an-Nadîm, pp. 244,268]、この写本はオランダの Leiden 図書館に所蔵されている。

（9） 彼の地理書は、Ibn an-Nadîm [p. 268] に従えば、al-Kindî（873年頃没）のためになされた粗末なアラビア語訳と、Thâbit b. Qurra（901年没）が行なった立派なアラビア語訳がある。なお、Ibn an-Nadîm に基づいている Ibn al-Qiftî [p. 98] は、al-Kindî が訳したとする。更には、本稿Ⅳで扱う Ibn Khurdâdhbih [*K. al-Masâlik wa-'l-mamâlik*（*Liber viarum et regnorum*）, ed. M. J. de Goeje, BGA, vol. Ⅵ, 1889, p. 3] も、自身が翻訳したととれる言い方をしている。また、al-Mas'ûdî [*Kitâb at-Tanbîh wa-'l-ishrâf*, ed. M. J. de Goeje, BGA, vol. Ⅷ, 1894（以下、この版を *Tanbîh* と略記）, pp. 33,127] に従えば、Marinus の地理書（Kitâb Jughrâfiyâ Mârînûs）も知られていたらしい。また、ササン朝の行政地理書をめぐっては、後述（本稿Ⅳ）の Ibn Khurdâdhbih の箇所を参照。

(10) 大地が丸く、宇宙の中心を占めるという考えは、Ptolemaeus などギリシアの考えを受け入れたものだが、インドからは世界（この場合は東半球）は東西南北のそれぞれの端から等距離のところに「世界の頂上」つまり中心を持ち、この「世界の頂上」が古くから有名な天文台のあるウジャイニの町の子午線の上にあるという考えが取り入れられた。ムスリムのもとで、この「世界の頂上」は qubbat al-ard「大地の円蓋」あるいは qubbat Arîn「アリーン（ウジャイニの誤った転写）の円蓋」と呼ばれるようになり、やがてこの観念が中世ヨーロッパにも伝えられ、コロンブスによるいわゆる新大陸発見に貢献した。なお、大地球形説はクルアーンの「{神は} 夜を昼に重ね、昼を夜に重ねたもうて」（39章5節）や、「また我らは大地を伸べ広げて」（15章19節、50章7節）にも現れている、とするムスリムの見解もある [Muhammad Mahmûd Muhammadayn, *at-Turâth al-jughrâfî al-Islâmî*, Riyadh : Dâr al-'Ulûm, 1984, pp. 57~58]。また、地理学を支え、推進力を与える聖句には、「言え。

お前達は地上を旅して嘘つきだと非難した者の結末がどうであったかを観よと」（クルアーン6章11節）、「彼らは地上を旅して、彼ら以前の者の結末がどうであったかを観なかったのか」（同40章82節）、「地上には信心深い者たちのへの種々の徴があり、またあなたがた自身の中にもある。それでもあなたがたは見ようとしないのか」（同51章20~21節）などがある。

(11) al-Mas'ûdî, *Murûj*, Ⅱ, p. 376 (*K. az-Zîj*『天文表』および *K. al-Qasîda fî hay'ât an-nujûm wa-'l-falak*『星と天体に関する長詩』の著者 al-Fazârî) と、*Murûj*, vol. V, 1974, p. 211 (「星や天体に関する長詩」の著者である星学者 Ibrâhîm al-Fazârî) ; Ibn an-Nadîm, pp. 79 (Abû 'Abd Allâh Muhammad b. Ibrâhîm b. Habib ・・・ al-Fazârî), 273 (Abû Ishâq Ibrâhîm b. Habîb al-Fazârî。著書は *K. al-Qasîda fî 'ilm an-nujûm*『星学に関する長詩』や *K. az-Zîj 'alâ sinî al-'Arab*『アラブ年用の天文表』など) ; Ibn al-Qiftî, pp. 57 (Ibrâhîm b. Habîb al-Fazârî。著書は *K. al-Qasîda fî 'ilm an-nujûm* や *K. az-Zîj 'alâ sinî al-'Arab* など), 270 (Muhammad b. Ibrâhîm al-Fazârî。彼はカリフ al-Mansûr の命に応じて al-Hind の天文書をアラビア語に訳し、*as-Sindhind al-kabîr*『大スィンドヒンド』と呼ばれる書を作り上げた)。以上に従うと、*K. az-Zîj* あるいは *K. az-Zîj 'alâ sinî al-'Arab* の著者は Ibrâhîm b. Habîb al-Fazârî、前記（註8）の *as-Sindhind al-kabîr* すなわち *Zîj as-Sindhind al-kabîr* の著者は Muhammad b. Ibrâhîm al-Fazârî となる。しかし、M. Hadj-Sadok は、この2名は親子であり、Abû Ishâq Ibrâhîm b. Habîb の方が父で、al-Mansûr 時代に生きて、*K. as-Sindhind* 他を著し、子の Abû 'Abd Allâh Muhammad b. Ibrâhîm b. Habîb は al-Ma'mûn 時代の後半に al-Asma'î の弟子の一人であった人物で、*K. az-Zîj 'alâ sinî al-'Arab*（パフラヴィー語から訳されたが、散逸）や *K. al-Qasîda fî 'ilm an-nujûm* などを著した、と考える [Le Kitâb al-Dja'râfiyya de Abû 'Abd Allâh Muhammad b. Abî Bakr az-Zuhrî, *Bulletin d'Études Orientales*, Institut français de Damas, 21,1968, pp. 27~31]。なお、al-Mas'ûdî [*Murûj*, Ⅱ, pp. 377~78] には、*K. az-Zîj* の著者 al-Fazârî (Ibrâhîm) による世界24地域の各面積の数値が挙がっている。更に、Ibn an-Nadîm [p. 278] は、Ya'qûb b. Târiq (796年没) が「Sindhind で解決される K. az-Zîj」という2部構成の書を著し、第1部は星学を扱うと記す。*Mahâ-siddhânta* を利用できたこの Ya'qûb は、777/8年に *Tarkîb al-aflâk*『天体の構造』を編んだ他、*az-Zîj* なども著し、彼と al-Fazârî とのこれらの作品が Sindhind ものの基礎を形成した [D. Pingree, "'Ilm al-Hay'a", *EI*², Ⅲ, p. 1136]。また、人文地理関係では、Abû 'l-Wizîr 'Umar b. Mutarraf (802年没) の、*K. Manâzil al-'Arab wa-hudûd-hâ wa-ayna kânat mahallat kull qawm wa-ilâ ayna intaqal min-hâ*『アラブの居所とその境界、そして各部族の野営地だった場所と彼らが移った場所』という作品もあったらしい [Ibn an-Nadîm, p. 127]。その他、al-Kalbî すなわち Abû 'n-Nadr (あるいは Abû 'n-Nâdir) Muhammad b. Mâlik b. as-Sâ'ib b. Bishr (763年没) が *K. Manâhil al-'Arab*『アラブの水場』という、おそらく地名辞典的な作品を著したという意見もある [Miquel, 前掲書, p. xv] が、Yâqût [*Mu'jam al-buldân* (*Jacut's Geographisches Wörterbuch*), ed. Ferdinand Wüstenfeld, Leipzig, 1924 (以下、この版を *Mu'jam* と略記), vol. I, p. 7 ; *Mu'jam al-buldân*, ed. Muhammad Amîn al-Khângî, Cairo : Matba'at as-Sa'âda, vol. I, 1906, p. 8] には、Muhammad b. Idrîs b. Abî Hafsa なる者の著作としてこの題名の書が挙がっている。また、Yâqût [*Mu'jam*, vol. Ⅱ, p. 876] は「al-Kalbî が *Kitâb Ansâb al-bilâd*『国(町)々の系譜』の中で言った」と記すが、この al-Kalbî が今問題にしている人物なのか、その息子、いわゆる Ibn al-Kalbî なのかははっきりしない。ちなみに、F. Wüstenfeld は後者と考えており [*Mu'jam*, vol. Ⅵ, p. 761]、Krachkovsky も同様な見解らしい [前掲書, p. 121]。本稿Ⅳの註55も参照。

(12) al-Muqaddasî [*K. Ahsan at-taqâsîm fî ma'rifat al-aqâlîm*, ed. M. J. de Goeje, BGA, vol. Ⅲ, 1906, p. 362] は、カリフ al-Wâthiq (在位842~47年) が星学者 (munajjim) の Muhammad b. Mûsâ al-Khuwârizmî を al-Khazar の王 Tarkhân のもとへ派遣したと記すが、後記（註23）の Muhammad b. Mûsâ b. Shâkir と混同している可能性がある。また、地図について触れると、al-Mas'ûdî [*Tanbîh*, p. 33] は、*as-Sûrat al-Ma'mûnîya*『マアムーン図』と呼ばれる世界地図が作製されたと記す。なお、at-Tabarî [*Ta'rîkh ar-rusul wa-'l-mulûk* (*Annales at-Tabari*), ed. M. J. de Goeje, vol. Ⅱ, 1964, Leiden : E. J. Brill, p. 1199] に、708年、al-Hajjâj (ウマイヤ朝の al-'Irâq 総督) は、Mâ warâ' an-nahr トランスオクシアナ征服のために派遣した Qutayba b. Muslim が Bukhârâ の包囲に手間取った時、その地域の "sûra (絵図)" を自分に送るよう命じ、それを見た後、自ら戦略を授けた、という記事が見られる他、こ

れよりは真実性に劣るが、Ibn al-Faqîh［BGA, V, p. 283］に、同じ al-Ḥajjâj が ad-Daylam（カスピ海の南の山岳地帯）の平地・山地・丘陵地・森林を描かせ、イスラームも jizya（非ムスリム住民に課せられる人頭税）も拒否する ad-Daylam 人たちにその "ṣûra" を見せて、彼らを従わせようとしたという話も挙がっており、イスラーム期に入ってからすでに地図が描かれていたことを窺わせる。

(13) (*Das Kitâb Ṣûrat al-Arḍ des Abû Ǧa'far Muḥammad ibn Mûsâ al-Ḫuwârizmî*) ed. Hans von Mžik, Leipzig: Otto Harrassowitz, 1926, テキスト pp. 3~158。本体と考えられる地図は、現在、ナイル川全図―「気候帯」の表示付き―、al-Jawhar 島、Mâyûtîs 海（アゾフ海）、インド洋を含む世界の海、の計４図が知られているが、世界地図は散失している。

(14) al-Khuwârizmî 自身は Marinus の地理書のアラビア語版も利用したかも知れない［D.M. Dunlop, *Arab civilization to AD 1500*, London：Longman, and Beirut：Librairie du Liban, 1971, p. 153］。また、Abû 'l-Fidâ'（1331年没）の *K. Taqwîm al-buldân*『国々の調査表』が「Baṭlimyûs（Ptolemaeus）に帰せられ、al-Ma'mûn（アッバース朝第７代カリフ）のためにアラビア語にされた書」［ed. M. Reinaud and Mac Guckin de Slane, Paris, 1840, p. 22］として、盛んに引用する *K. Rasm ar-rub' al-ma'mûr*『居住地域の描写』は、実際には al-Khuwârizmî のこの書なのかも知れない［Hopkins, 前掲論文, p. 304］。

(15)『星と天体運動との学の集成』や『天文学入門』という書名の他に、*Uṣûl 'ilm an-nujûm*『星学の基礎』、*Kitâb al-Fuṣûl ath-thalâthîn*『30章の書』とも呼ばれる。Johannes Hispalensis によるラテン語訳は、1493年（Farrara）、1537年（Nuremberg）、1546年（Paris）、そして1943年（ed. F. J. Carmody, Berkeley）に印刷され、Cremona の Gerard によるラテン語訳は、1910年（ed. R. Campani, Città di Castello）に出版された。また、Jacob Anatoli によるヘブライ語訳もあり、これを Jacob Christmann がラテン語訳したものが、1590年（Frankfurt-am-Main）に印刷された［以上、H. Suter － J. Vernet, "Al-Farghânî", *EI*², vol. Ⅱ, Leiden：E. J. Brill, and London：Luzaq & Co, 1965, p. 793］。

(16) (*Muhammedis fil. Ketiri Ferganensis, qui vulgo Alfraganus dicitur, Elementa astronomica*) ed. & Latin tr. Jacob Golius, Amsterdam, 1669, 第８・９章テキスト pp. 30~39［repr. Frankfurt am Main：Institut für Geschichte der Arabisch-Islamischen Wissenschaften, 1986］。

(17) 更には、al-Mas'ûdî の『黄金の牧場と宝石の鉱山』も、al-Farghânî のこの天文書を *al-Fuṣûl ath-thalâthûna*『30章』という書名の下で、利用している。

(18) 前記の「アラブの哲学者」という表現も含めて、Ibn an-Nadîm［pp. 255~61］。

(19) al-Mas'ûdî, *Tanbîh*（註9）, p. 25。Ibn an-Nadîm［p. 260］は Risâlat-h al-kubrâ fî 'r-rub' al-maskûn「居住地域に関する大書簡」を挙げているが、『大地の居住域の描写』との関係は不明である。Ibn an-Nadîm［p. 260］は更に、Risâlat-h fî ab'âd masâfât al-aqâlîm「諸地方の距離に関する書簡」なども挙げている。

(20) 12世紀前半に Robertus Retinensis（1143以後没）によってラテン語訳された（現存しない）のをはじめ、1140年に Plato Tibastinus によってもラテン語訳された（1537年に Nuremburg、1645年に Bologna で出版され、現存する）。また、カスティリア王 Alphonso X（在位、1252~82年）の命によってアラビア語から直接スペイン語に訳された（不完全な写本が Paris にある）。そして、これらは Regiomontanus（1436~76年）や Dunthorne（18世紀）などが大いに利用するところとなった［C. A. Nallino, "Al-Battânî", *EI*², vol. Ⅰ, Leiden：E. J. Brill, and London：Luzaq & Co, 1960, pp. 1104~05］。

(21) (*Al-Battânî sive Albatenî Opus astronomicum*) ed. Carolo Alphonso Nallino, Rome, 1899, 第６章のテキスト pp. 21~28, 各地の経緯度表 pp. 234~42。

(22) al-Jayhânî の『諸道と諸国』自体は現在知られていないが、この書が al-Battânî の天文書を利用しているという M. Ahmad の説［前掲書, p. 26］を採用した。

(23) ① Abû Ma'shar, *al-Mudkhal*（あるいは *al-Madkhal*）*al-kabîr ilâ 'ilm aḥkâm an-nujûm*『占星術大入門』, facsimile edition from MS 1508 Carullah Collection, Süleymaniye Library Istanbul, Frankfurt am Main：Institut für Geschichte der Arabisch-Islamischen Wissenschaften (Institute for the History of Arabic-Islamic Science at the Johann Wolfgang Goethe University), 1985。なお、1133年の Johannes Hispalensis によるラテン語訳（*Liber major introductorius ad scientiam iudicorum astrorum*）や1150年の Hermannus

Secundus によるラテン語訳（1489年、*Introductorium in astronomiam Albumasaris Abalachî octo continens libros partiales* というタイトルで Augsburg において印刷された）がある。また、Abû Ma'shar には、Ibn Rustih の前掲書の地理部分が利用している作品として、*K. al-Aflâk wa-tarkib as-samâ'*『天体と天空構造』もある。② al-Khuwârizmî の原テキストは断片しか分からないが、al-Majrîtî による修正本（10世紀後半）を Bath の Adelard がラテン語訳したもの（1126年?）が伝わっている［ed. H. Suter, *Die astronomischen Tafeln des Muhammad ibn Mûsâ al-Khârizmî*, Copenhagen, 1914；tr. O. Neugebauer, *The Astronomical Tables of al-Khwârizmî*, Copenhagen, Ejnar Munksgârd, 1962］。③ Yahyâ b. Abî Mansûr, *az-Zîj al-Ma'mûnî al-mumtahan*『マアムーン立証天文表』, facsimile edition from MS Arabe 927 Escorial Library, Frankfurt am Main, Institut für Geschichte der Arabisch-Islamischen Wissenschaften, 1986。④～⑦ Habash の *az-Zîj al-Mumtahan* 他の天文表は Ibn an-Nadîm［p. 275］と al-Mas'ûdî［*Tanbîh*, p. 222］、al-Jawharî の天文表は Ibn al-Qiftî［p. 219］、Abû Ma'shar の２つの天文表は Ibn an-Nadîm［p. 277］、an-Nayrîzî の２つの天文表は Ibn an-Nadîm［p. 279］。更には、Ibn an-Nadîm に拠れば、Ibn al-Bâzyâr（Muhammad b. 'Abd Allâh b. 'Umar）［p. 276］、al-Hârith al-Munajjim［p. 278］、Ibn Amâjûr（Abû 'l-Qâsim 'Abd Allâh、885年から933年活躍）［p. 280］など、また、al-Mas'ûdî［*Tanbîh*, p. 199］に拠れば、Mâ Shâ' Allâh（後述）、Muhammad b. Khâlid al-Marwarrûdhî（９世紀前半活躍）、Ibn al-Furrukhân at-Tabarî、al-Hasan b. al-Khasîb（Abû Bakr al-Hasan b. al-Khasîb、９世紀後半活躍）も天文表を著したようだ。その他、Z. Alavi はこの世紀の数理地理学の中に、al-Mâhânî（Abû 'Abd Allâh Muhammad b. 'Îsâ、874年以後没）、Thâbit b. Qurra（Abû 'l-Hasan as-Sâbî、901年没）、Qustâ b. Lûqâ al-Ba'labakkî（922年以前没）や、Abû Sa'îd ad-Darîr と Abû Sa'îd al-Asturlâbî（共に９世紀前半活躍）、Hâmid b. 'Alî と 'Alî b. 'Îsâ（共に９世紀後半活躍）なる人物の天文関係の作品も挙げている［前掲書, pp. 22,24］。ちなみに、M. Ahmad は前掲書で、Astronomical Literature という章を設け、Mâ Shâ' Allâh、al-'Abbâs b. Sa'îd al-Jawharî、Yahyâ b. Abî Mansûr、Thâbit b. Qurra、al-Khuwârizmî、al-Farghânî、Habash al-Hâsib、Qustâ b. Lûqâ、al-Battânî、an-Nayrîzî などに言及している［pp. 20~28］。最後に、Mûsâ b. Shâkir 家の３兄弟（９世紀に天文・数理地理学の分野で活躍した、Muhammad と Ahmad と al-Hasan）のうちの Muhammad のことに触れておかねばなるまい。この Muhammad b. Mûsâ b. Shâkir（872/3年没）［Ibn an-Nadîm, p. 271］は、Ibn Khurdâdhbih［BGA, VI, pp. 106~07］や al-Mas'ûdî［*Murûj*, II, p. 39］に、アッバース朝第９代カリフ al-Wâthiq（在位842~47年）の命で小アジアの 'Ammûriyya アモリウムと Nîqiyya ニカエアとの間にあるという ar-Raqîm の洞窟を探し求めまわった人物として登場する munajjim（星学者）Muhammad b. Mûsâ と同じ人物とみられる［Miquel, 前掲書 p. xix］が、Ibn Rustih［*K. al-A'lâq an-nafîsa*, ed. M. J. de Goeje, BGA, vol. VII, 1892, p. 83］は、この munajjim に拠るとして、ビザンツ人は ar-Ruhâ エデッサの教会より素晴らしい石像建築はないと言う、という記述を挙げているのである。尤も、この記述が Muhammad b. Mûsâ のものかは疑問が多い。なお、Gaston Wiet は、al-Ya'qûbî の *K. al-Buldân*［ed. M. J. de Goeje, BGA, VII, p. 266］に「Muhammad b. Mûsâ al-Munajjim と彼の兄弟たち」とあるのに、この Muhammad や上記の Ibn Rustih 中の Muhammad を前述の al-Khuwârizmî と見なしているようだ［*Ya'kûbî Les Pays*, Cairo：L'Institut français d'archéologie orientale, 1937, p. 59；*Ibn Rusteh Les Atours Précieux*, Cairo：La Société de géographie d'Égypte, 1955, p. 91］。

(24) *K. al-Anwâ' fî mawâsim al-'Arab*, Hyderabad：Dâ'irat al-Ma'ârif al-'Uthmânîyah, 1956。アンワーは folk astronomy とも表現されるが、現存するアンワーの書には、Ibn Qutayba の作品のタイプの他に、農事カレンダーのタイプ―例、『コルドバ歳時記』（10世紀）―もある［David A. King, "Astronomy", *Religion, learning and science in the 'Abbasid period*, p. 275］。

(25) ad-Dînawarî の書は Ibn an-Nadîm［p. 78］に拠る。al-Mas'ûdî［*Murûj*, II, p. 359］は、この書を Ibn Qutayba が盗用したと言う。また、星学者 as-Sûfî（Abû 'l-Husayn 'Abd ar-Rahmân b. 'Umar ar-Râzî、986年没）［*Kitâb Suwar al-kawâkib ath-thamâniya wa-'l-arba'în*, Beirut：Dâr al-Âfâq al-Jadîda, 1981, p. 7］は、ad-Dînawarî のこの作品を絶賛する。次に、al-Asma'î の書は Ibn an-Nadîm［pp. 55,88］、al-Mubarrad の書は Ibn an-Nadîm［pp. 59,88］、Abû Ma'shar の書は Ibn an-Nadîm［p. 277］、Thâbit b. Qurra の書は Ibn al-Qiftî［p. 119］、Ibn Khurdâdhbih の書は Ibn an-Nadîm［p. 148］に、それぞれ拠る。

アンワーの著者としては、その他、Mu'arrij as-Sadûsî（Abû Fayd Mu'arrij b. 'Amr b. al-Hârith、810年没）[Ibn an-Nadîm, p. 48]、an-Nadr b. Shumayl（Abû 'l-Hasan an-Nadr b. Shumayl al-Mâzinî at-Tamîmî、819年頃没）[Ibn an-Nadîm, p. 52]、Ibn Kunâsa（Abû Muhammad 'Abd Allâh b. Yahyâ、822/3年没）[Ibn an-Nadîm, p. 71；as-Sûfî, *Suwar al-kawâkib*, p. 7]、Ibn al-A'râbî（Abû 'Abd Allâh Muhammad b. Ziyâd al-Kûfî、846年没）[Ibn an-Nadîm, p. 88；as-Sûfî, *Suwar al-kawâkib*, p. 7]、Muhammad b. Habîb（Abû Ja'far Muhammad b. Habîb b. Umayya b. 'Amr、859/60年没）[Ibn an-Nadîm, pp. 88,106]、ash-Shaybânî（Abû Muhallim Muhammad b. Hishâm b. 'Awf as-Sa'dî、862/3年没）[Ibn an-Nadîm, pp. 46,88] といった言辞学関係の専門家や、文人 al-Marthadî（Abû Ahmad b. Bishr、9世紀後半活躍）[Ibn an-Nadîm, pp. 88,129]、星学者 al-Hasan b. Sahl b. Nawbakht [Ibn an-Nadîm, p. 275] が挙げられる。言辞学関係の専門家が多く見られるが、彼らは遊牧民の言語や遊牧民が伝える詩歌を主な研究対象としていたので、同じ遊牧民の伝統的知識であったアンワーも取り扱ったのであろう。

(26) この書は主に、占星術を使った雨の予測方法を記したものである [ed. G. Levi Della Vida, *Rivista degli Studi Orientali*, 14, Rome, 1933~34, pp. 270~81]。その他、Sahl b. Bishr（Abû 'Uthmân Sahl b. Bishr b. Hânî、9世紀前半活躍）の *K. al-Amtâr wa-'r-riyâh*『雨と風』[Ibn an-Nadîm, p. 274] や、Abû Ma'shar による *K. al-Amtâr wa-'r-riyâh wa-taghayyur al-ahwiya*『雨と風、空気の変化』や *K. Tabâ'i' al-buldân wa-tawallud ar-riyâh*『国々の本性と風の発生』[Ibn an-Nadîm, p. 277] も自然地理を扱った作品と考えられる。そして、al-Kindî にも、「気象に関する書簡」[*Risâla Ya'qûb b. Ishâq al-Kindî fî Hawâdith al-jaww*, ed. Yûsuf Ya'qûb Miskûnî, Baghdad：Matba'at Shafîq, 1965] があり、Rosenthal に拠れば、弟子の Sarakhsî にも「気象に関する書」K. fî Ahdâth al-jaww という作品があるらしい [前掲書 p. 58]。

(27) al-Kindî の『海洋と潮汐』（「海洋と潮汐に関する書簡」?）[al-Mas'ûdî, *Tanbîh*, p. 51] は『潮汐』（「潮汐に関する書簡」）[Ibn an-Nadîm, p. 261] と、また、as-Sarakhsî の『海洋と山岳と河川の諸利点』（「海洋と山岳と河川の諸利点に関する書簡」?）[al-Mas'ûdî, *Tanbîh*, p. 51] は *al-Bihâr wa-'l-miyâh wa-'l-jibâl*『海洋と諸水と山岳』（「海洋と諸水と山岳に関する書簡」）[al-Mas'ûdî, *Murûj*, Ⅰ, p.148] や『山岳の利点』[Ibn an-Nadîm, p.262] と、同一ではなかろうか。Krachkovsky は as-Sarakhsî の『海洋と諸水と山岳に関して』と『山岳の利点』を同一作品とみなしている [前掲書, p. 127]。なお、Ibn an-Nadîm の *al-Fihrist* には、その他、Abû Zayd al-Ansârî（830/1年没）をはじめ、Ahmad b. Hâtim（845/6年没）、Ibn as-Sikkît（857年以後没）、as-Sijistânî（863年頃没）他による、雨や風、植物などに関する書物が多数挙がっているが、著者たちの他作品から見て、言辞学的な内容のものが大半ではなかったと推察される。例えば、Abû Zayd による *K. al-Matar*『雨』[Ibn an-Nadîm, p. 55] や、ad-Dînawarî による *K. an-Nabât*『植物』[Ibn an-Nadîm, p. 78] は言辞学的な内容と言われる [前者は Shâkir Khasbâk, *Fî al-Jughrâfiya al-'Arabîya*, Beirut：Dâr al-Hadâtha, 1988, p. 9。後者は B. Lewin, "Al-Dînawarî", *EI²*, Ⅱ, p. 300]。

28) Ibn an-Nadîm [pp. 96~98] には、140近くの書名が挙がっている。しかし、現在知られているものは、*K. Jamharat an-nasab* [Escorial Library 所蔵の MS. Arabe 1698や、British Museum 所蔵の MS. Add. 23297；Werner Caskel & Gert Strenziok, *Gamharat an-Nasab des Ibn al-Kalbi*, 2vols., Leiden：E. J. Brill, 1966] と *K. al-Asnâm* [ed. Ahmad Zakî Bâshâ, Cairo：Dâr al-Kutub al-Misrîya, 1924] と *K. Ansâb al-khayl fî 'l-Jâhilîya wa-'l-Islâm wa-akhbâr-hâ* [ed. Levi Della Vida, Leiden：E. J. Brill, 1928] など、極めて少数である。

29) *K. Nuzhat al-mushtâq fî 'khtirâq al-âfâq* (*al-Idrîsî Opus geographicum*), ed. A. Bombaci, et al., Naples：Istituto Universitario Orientale di Napoli & Rome：Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente（以下、この版を *Opus* と略記）, Fasc. Ⅰ, 1982, p. 43；J. H. Kramers, "Djughrafîya", *Encyclopaedia of Islam*（以下、*E. I.²* と略記）, Supplement, Leiden：E. J. Brill, 1939, p. 63；cf. Krachkovsky, 前掲書, p. 121。ただし、al-Idrîsî は Hassân b. al-Mundhir の *Kitâb al-'Ajâ'ib* と記しており、この人物が Ibn al-Kalbî とは別人の可能性もある。また、Yâqût に拠れば、Ibn al-Kalbî は Armînîya の Buhayrat Khilât を「この世（ad-Dunyâ）の奇事の一つ」[*Mu'jam*, Ⅱ, p. 458] あるいは「アルメニアの奇事の一つ」[*Mu'jam*, Ⅰ, p. 513] と言ったとあるが、この記述は『4奇事集』と関係があるのだろうか。そし

て、Ibn an-Nadîm［p. 97］に従うと、Ibn al-Kalbî は「国々の akhbâr（歴史的情報）に関する書物」として、『国々』という大小２作品、『河川』、『４奇事集』の他、*K. Tasmiyat man bi-'l-Hijâz min ahyâ' al-'Arab*『ヒジャーズにいるアラブ諸部族出身者の命名』、*K. Qismat al-ardayn*『両地の分割』、*K. al-Hîrat*『アル＝ヒーラ』、*K. Manâr al-Yaman*『イエメンの道標』、*K. Aswâq al-'Arab*『アラブの諸市場』、*K. al-Aqâlîm*『諸イクリーム（地方？）』、*K. al-Hirat wa-tasmiyat al-biy' wa-'d-diyârât wa-nasab al-'ibâdiyin*『アル＝ヒーラ、教会と家屋との命名、イバードたちの系図』の、計11の作品を著している。また、このIVで後述するが、Yâqût の *Mu'jam*（註55）に拠れば、*K. Ishtiqâq al-buldân*『国々の語源』という作品もある。更に、Ibn an-Nadîm［p. 97］は、「akhbâr と夜話に関する書」として、*K. 'Ajâ'ib al-bahr*『海の奇事』という作品も挙げている。ちなみに、Abû 'l-'Anbas as-Saymarî（888年以前没）も、Ibn an-Nadîm［p. 152］に従うと、同名の書を著したらしい。

30) Charles Pellat は193作品を挙げている［Gâhiziana Ⅲ. Essai d'inventaire de l'œuvre gâhizienne, *Arabica*, 3, 1956, pp. 149~80］。

31) Kitâb al-Buldân, ed. Sâlih Ahmad al-'Alî, *Majallat Kullîyat al-Âdâb, Jâmi'at Baghdâd*, 12,1970, pp. 439~506（テキスト pp. 462~506。但し、テキストの基になった写本の一つ、MS. Brit. Mus. or. 3138, foll. 199a~219a は、*K. Fi 'l-awtân wa-'l-buldân*『祖国と諸国』の題名を持つ）; al-Awtân wa-'l-buldân, ed. 'Abd as-Salâm Muhammad Hârûn, *Rasâ'il al-Jâhiz*, vol. IV, 1979, Cairo : Maktabat al-Khângî, テキスト pp. 109~47 ; Kitâb al-Amsâr wa-'ajâ'ib al-buldân, ed. Ch. Pellat, *al-Mashriq*, 60, Beirut, 1966, pp. 169~205（テキスト pp. 171~205。MS. Brit. Mus. 1129に基づく）。タイトルはいずれも異なるが、テキスト自体はほぼ同一である。Pellat は al-Jâhiz の193作品を挙げる際、*Kitâb al-Amsâr wa-'ajâ'ib al-buldân* を *Kitâb al-Buldân* と同一のものとして、前者でなく後者 *Kitâb al-Buldân* を作品数に入れている［Gâhiziana Ⅲ, pp. 151,54］。また、'Abd as-Salâm Muhammad Hârûn は、*al-Awtân wa-'l-buldân* は *al-Amsâr wa-'ajâ'ib al-buldân* とも呼ばれると注記している［*Rasâ'il al-Jâhiz*, vol. Ⅲ, 1979, p. xi］。おそらく、Yâqût が al-Jâhiz の著作として挙げる『国々の書』［*Mu'jam*, II, p. 593 ; *K. Irshâd al-arîb ilâ ma'rifat al-adîb*, ed. D. S. Margoliuth, London : Luzac & Co.（以下、この版を *Irshâd* と略記）, vol. VI, 2nd ed., 1931, p. 77］、al-Mas'ûdî が挙げる『諸都市と国々の奇事との書』［*Murûj*, I, p. 206; *Tanbîh*, p. 55］、al-Muqaddasî や an-Nuwayrî が挙げる *Kitâb al-Amsâr*『諸都市の書』［al-Muqaddasî, BGA, Ⅲ, p. 4 ; an-Nuwayrî, *Nihâyat al-arab fî funûn al-adab*, vol. I, Cairo : Wizârat ath-Thaqâfa, 1954, p. 371］、Ibn Hawqal が挙げる「諸都市（al-amsâr）の知識に関する貴重な書」［*K. Sûrat al-ard*, ed. J. H. Kramers, BGA, vol. II, 1938, p. 372］、更には ath-Tha'âlibî が挙げる *Khasâ'is al-buldân*『国々の特徴』［*Thimâr al-qulûb fî 'l-mudâf wa-'l-mansûb*, ed. Muhammad Abû al-Fadl Ibrâhîm, Cairo : Dâr Nahdat Misr, 1965, pp. 411,438］は、いずれも同じものか、類似の内容のものではなかろうか。なお、al-Jâhiz の『動物』（ed. 'Abd as-Salâm Muhammad Hârûn, 8vols., Cairo : Maktabat Mustafâ al-Bâbî al-Halabî wa-Awlâd-h, 1944~69）や *al-Hanîn ilâ al-awtân*『望郷』（ed. 'Abd as-Salâm Muhammad Hârûn, *Rasâ'il al-Jâhiz*, vol. II, 1965, pp. 380~412）などにも、この『国々』中の記事と同一あるいは類似のものが幾つか見られる。

32)『国々』は、Yâqût［*Mu'jam*, II, 593］に拠れば ad-Dimashq、また、ath-Tha'âlibî［*Latâ'if al-ma'ârif*, ed. Ibrâhîm al-Abyârî & Hasan Kâmil as-Sayrafî, Cairo : Dâr Ihyâ' al-Kutub al-'Arabîya, 1960］に拠れば al-Yaman［pp. 166~67］や al-Bahrayn［pp. 230~31］の記述を含んでいる。

33) Yûsuf al-Hâdî は Ibn al-Faqîh が『動物』を利用したとするが、この『国々』に関しては言及していない［Ibn al-Faqîh, *Kitâb al-Buldân*, ed. Yûsuf al-Hâdî, Beirut : 'Âlam al-Kutub, 1996（この版を Beirut 版と略記）, p. 15］

34) Yazdjird b. Mihmandâr al-Fârisî, *Fadâ'il Baghdâd al-'Irâq*, ed. Mîkhâ'îl 'Awâd, Baghdad : Matba'at al-Ma'ârif, 1947,18pp., cf. Ibn al-Faqîh, Beirut 版, pp. 317,339（Yazdijird b. Mihbandâd al-Kisrawî）; Yâqût, *Mu'jam*, IV, pp. 445~46（Yazdijird b. Mihyandâdh al-Kisrawî）; Ibn an-Nadîm, p. 128（Yazdijird b. Mihnabdân al-Kisrawî）。Franz Rosenthal は、as-Sarakhsî にも Yazdijird と同様、バグダードの美点に関する著作があると言う［*Ahmad b. at-Tayyib as-Sarahsî*, New Haven : American Oriental Society, 1943, p. 59］が、Yazdjird は as-Sarakhsî によるこの fadâ'il 書を利用したのではなかろうか。cf. Ibn

al-Faqîh, Beirut 版, pp. 326~27。また、Ibn Tammâm の作品は Ibn an-Nadîm [p. 110] に拠る。そして、'Umar b. Shabba 著の *K. Fadâ'il al-Basra* という存在は、Salâh ad-Dîn al-Munajjid の説に拠る [*Fadâ'il al-Andalus wa-ahl-hâ li-'bn Hazm wa-'bn Sa'îd wa-'sh-Shaqundî*, Beirut : Dâr al-Kitâb al-Jadîd, 1968, pp. i~ii]。cf. Ibn an-Nadîm, p. 112。この S. al-Munajjid は fadâ'il 書の中に、Abû 'Abd ar-Rahmân al-Haytham b. 'Adî（823年没）著 *Fakhr ahl al-Kûfa 'alâ ahl al-Basra*『バスラ住民に対するクーファ住民の誇り』という作品も挙げている [上掲書, p. vii]。

35) (*Relation de la Chine et de l'Inde*) ed. & French tr. Jean Sauvaget, Paris : Société d'édition "Les Belles Lettres", 1948, テキスト pp.2~27。なお、この作品の冒頭に 1 度だけ「商人 Sulaymân が語った」という記述が登場する [ed. J. Sauvaget, p. 7] ので、この人物を作者とする説がある。また、Ibn al-Faqîh も商人 Sulaymân という名を挙げている [BGA, V, pp. 11~13 ; Beirut 版, pp. 66~68]。そして、次世紀に Abû Zayd as-Sîrâfî がこの作品に補遺を付け加えたものをまとめるが、Paris にあるその全体の唯一の写本は、写字生によって Silsilat at-tawârîkh『歴史の鎖』というタイトルが付けられている [*Silsilat at-tawârîkh*, ed. L. Langles, Paris, 1811 ; (*Relation des voyages*) ed. & French tr. M. Reinaud, Paris, 1845]。

36) Ibn Khurdâdhbih が利用したという見解は、J. Sauvaget に拠る [*Relation de la Chine et de l'Inde*, pp. xxiii~xxiv] が、J. Sauvaget はその他、al-Bîrûnî もこの『中国とインドの情報』利用しているとする [Ibid., pp. xxvi~xxvii]。なお、商人 Sulaymân の他、Ibn Wahab al-Qurashî（別名、Ibn Habbâr）が870年以降、al-Basra から Sîrâf を経て、海路 as-Sîn の Khânfû（広州）に至り、その後、Khumdân（長安）で皇帝に会見したという話が、後述（VI）する Abû Zayd 著『中国・インド情報』補遺 [Sulaymân at-Tâjir & Abû Zayd as-Sîrâfî, *Akhbâr as-Sîn wa-'l-Hind*, ed. Ibrâhîm Khûrî, Beirut : Dâr al-Mawsim li-l-I'lâm, 1991, pp. 65~70] や、この Abû Zayd に拠る al-Mas'ûdî の『黄金の牧場と宝石の鉱山』[Ibn Habbâr として、*Murûj*, I , pp. 168~73] に記されている。

37) Ibn Dihya, *K. al-Mutrib min ash'âr ahl al-Maghrib*, ed. Mustafâ 'Awad al-Karîm, Khartoum : Matba'at Misr, 1954, pp. 125ff., 130ff. [Dunlop, 前掲書, pp. 161~62,311] ; K. al-Mutrib fî ash'âr ahl al-Maghrib, Cod. Mus. Brit. Or. 77 [L] fol. 104v. ~111 [*Rerum Normannicarum fontes Arabici*, ed. Alexander Seippel, fasc. II , Oslo, 1928, pp. 13~20]。al-Maqqarî, *K. Nafh at-tîb min ghusn al-Andalus ar-ratîb wa-dhikr wazîr-hâ Lisân ad-Dîn bn al-Khatîb* (*Analectes sur l'histoire et la littérature des Arabes d'Espagne*), ed. R. Dozy, G. Dugat, L. Krehl and W. Wright, vol. I , Amsterdam : Oriental Press, 1967, pp. 630~31。更に al-Maqqarî [上掲書, I , p. 223] に拠ると、この人物はこのノルマンとの交渉の旅より前に、840年頃、やはり外交使節としてビザンツ皇帝 Tûfilus (Theophil) との平和条約締結のためにコンスタンティノープルも訪れたらしい。また、al-Mas'ûdî [*Murûj*, I , pp. 258~59] に拠ると、コルドバの Khashkhâsh と呼ばれる男（ノルマン人との戦闘で859年に死んだと言われる船乗りか）が他の若者たちと、特別に艤装した船団を組んで、周海 (al-Bahr al-muhît) に遠征に出掛け、豊かな戦利品を持って帰って来たと伝えられる。

38) Ibn Khurdâdhbih, BGA, VI, pp. 162~70（往路に16カ月、復路に12カ月）; Ibn Rustih 以下はほとんど Ibn Khurdâdhbih に拠っている。De Goeje は彼らが万里の長城まで行ったと考えた [J.Marquart, *Osteuropäische und ostasiatische Streifzüge*, Leipzig, 1903, p. 86, n. 1] が、A. Zeki Validi Togan は彼らは天山東部の Kulja の北にある鉄門 Talka に至ったのだろうという見解を示す [*Ibn Fadlân's Reisebericht*, Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, 24-3, Leipzig : Deutsche Morgenländische Gesellschaft, 1939, p. 196n]。その上で、Krachkovsky は Derband の有名なカフカスの堰は見たことは疑いないと言う [前掲書, p. 140]。類似の探索の旅として、前記（III）の占星術師（munajjim）Muhammad b. Mûsâ（? Muhammad b. Mûsâ b. Shâkir）による ar-Raqîm の洞窟を探す旅がある。なお、al-Muqaddasî [BGA, III, pp. 153~54] に拠れば、ar-Raqîm の洞窟探索は、すでに前世紀の720年に、Mujâhid b. Yazîd が Khâlid al-Barîdî と共にコンスタンティノープルやアモリウムを訪れた後、行なっている。また、Yâqût [*Mu'jam*, II , pp. 806~07] も、前述した 'Ibâda b. as-Sâmit が、コンスタンティノープルへの旅（後世の作り話か）の途中に ar-Raqîm の洞窟を訪れたという話を挙げている。

39) V. Minorsky, *Sharaf al-Zamân Tâhir Marvazî on China, the Turks and India*, London：The Royal Asiatic Society, 1942, pp. 125~27,142~43]。なお、Ibn Rustih [BGA, Ⅶ, p. 132] が記す、９世紀初頭 [V. Minorsky, *Hudûd al-'Âlam*, London：Luzac & Co., 1937（以下、この書を *Hudûd* と略記）, p. 236]、クメールに２年滞在したという Abû 'Abd Allâh Muhammad b. Ishâq による情報を、V. V. Barthold は、Ibn Rustih だけでなく Ibn Khurdâdhbih 他の地理著作家にとってもインドに関する基本ソースとみなしている [V. Minorsky, *Hudûd*, pp. 26~27]。また、al-Idrîsî [*Opus*, Ⅰ, p. 66] に拠れば、カリフ Hârûn ar-Rashîd（在位786~809年）の弟 Ibrâhîm b. al-Mahdî（839年没）がその著 *K. at-Tîb*『香り』の中で、兄のカリフが竜涎香の正体を探るためにイエメンへ人々を派遣し、彼らが半島南部住民による情報をもたらしたと述べている。

40) この Muslim なる人物は、845年にキリキアの Lâmis（Lamus）川でビザンツの虜囚から解放され [Krachkovsky, 前掲書, p. 149；Adam Mez, *Die Renaissance des Islams*, Heidelberg：C. Winter, 1922, p. 264]、al-Mas'ûdî [*Tanbîh*, pp. 257~58] に拠れば、ビザンツの皇帝・貴族たちやビザンツの街道・領域に関する諸作品を著したらしい。cf. Ibn Khurdâdhbih, BGA, VI, pp. 105~08, ；Qudâma, *K. al-Kharâj wa-san'at al-kitâba*, ed. M. J. deGoeje, BGA, VI, p. 259。また、Ibn Rustih [BGA, Ⅶ, pp. 119~32] や al-Qazwînî [*Âthâr al-bilâd* (*Zakarija Ben Muhammad el-Cazwini's Kosmographie*, vol. Ⅱ), ed. F. Wüstenfeld, Göttingen, 1848, pp. 397~99,406~07] に拠れば、ビザンツとの戦争で捕虜になった Hârûn b. Yahyâ なる者が、900年頃、コンスタンティノープルの他、サロニカを通ってローマなども訪れたらしい。その他、９世紀における陸路の旅行としては、Ibn al-Faqîh [BGA, V, pp. 137~39；Beirut 版, pp. 183~85] が記す、814年以前の 'Umâra b. Hamza によるコンスタンティノープルへの使節旅行や、Ibn al-Faqîh [Beirut 版, pp. 637~39] や Yâqût [*Mu'jam*, Ⅰ, p. 840；Ⅳ, p. 823] が明記し、Ibn Khurdâdhbih や Qudâma も利用したと考えられる [V. Minorsky, "Tamîm ibn Bahr's journey to the Uyghurs", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 12, London, 1947~8, p. 276]、821年頃の Tamîm b. Bahr al-Muttawwi'î（中央アジアのイスラーム辺境地帯の兵士か）による、おそらく外交使節としてのウィグル旅行（オルホン河畔にあるウイグルの都 Kharabalghasun を訪問）もある。

41) Ibn Khurdâdhbih は、『諸道と諸国』だけでなく、*K. al-Lahw wa-'l-malâhî*『娯楽と楽器』(ed. Ighnâtiyûs 'Abduh Khalîfa, *al-Mashriq*, 54,1960, pp. 129~67) や、前記（註25）の *K. al-Anwâ'* の他、Ibn an-Nadîm [p. 149] に拠れば、*K. Adab as-samâ'*『聴取作法』、*K. at-Tabîkh*『料理』など５作品（大宮人としての嗜みを扱う）、更には、al-Mas'ûdî [*Murûj*, Ⅰ, p. 14] に拠れば、大世界史―al-Bakrî が『諸道と諸国』の序としての歴史記述に利用―も著した。なお、彼の没年に関しては912年頃という説もある。

42) (*Liber viarum et regnorum*), ed. & French tr. M. J. de Goeje, BGA, vol. VI. 1889, テキスト pp. 3~183。２稿があるというのは、De Goeje の説 [Ibn Khurdâdhbih, *al-Masâlik wa-'l-mamâlik*, BGA, Ⅵ, p. xx] に従ったものだが、J. Marquart は885年頃の稿しかないと言う [前掲書, p. 390]。また、De Goeje は現在に伝わるものは要約本だという説をとる [上掲書, p. xvii] が、Ibn al-Faqîh や Ibn Rustih などが Ibn Khurdâdhbih からとして引用する記事は、より完全なテキストであり、Ibn Khurdâdhbih を利用したと明言する、al-Idrîsî 他の後世の地理書執筆者たちの記述から推測すると、この説は妥当だと思われる。

43) Ibn al-Kalbî からは下 al-Fallûja の町々に関する奇事(アジャーイブ)、al-Jâhiz からは at-Tubbat チベットでの喜笑ほかのアジャーイブを引用している。また、第４部では Muslim b. Abî Muslim al-Jarmî による ar-Rûm や、占星術師 Muhammad b. Mûsâ による ar-Raqîm の持ち主たちなど、第７部では通訳 Sallâm による Yâjûj と Mâjûj の堰などに関する、すでに触れたようなアジャーイブを載せている。しかし、この書はこうしたアジャーイブを含んでいるとはいえ、「国々の奇事の学」ではなく、あくまでもイスラーム圏という枠組みに沿い、その圏内に焦点を当てた「諸道と諸国の学」の作品である。

44) J. H. Kramers, "L' influence de la tradition iranienne dans la géographie arabe", *Analecta Orientalia*, vol. Ⅰ, Leiden：E. J. Brill, 1954, pp. 149~50。また、上記のギリシア系統のコスモグラフィー共々、前述のⅡも参照。

45) これら非ムスリム商人に関する記述は、Moshe Gil［"The Râdhânite Merchants and the Land of Râdhân", *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 17,1974, pp. 299~328］や、Franciszek Kmietowicz ["The term *ar-Râdânîya* in the work of Ibn Hurdâdbeh", *Folia Orientalia*, 11,1969, pp. 163~73］他、多くの研究者に利用されている。

46) al-Ya'qûbî による利用は Barthold の説［Minorsky, ***H**udûd*, p. 14］に従う。al-Bakrî は Ibn Rustih を通して Ibn Khurdâdhbih を利用したのかも知れない［*Kitâb al-Masâlik wa-l-Mamâlik li-Abî 'Ubayd al-Bakrî*, ed. A. P. van Leeuwen & A. Ferre, vol. Ⅰ, Carthage : ad-Dâr al-'Arabîya li-l-Kitâb, 1992, p. 22］。

47) al-Khazzâz の書は Ibn an-Nadîm, p. 105 ; Yâqût, *Irshâd*, vol. Ⅰ, 2nd ed., 1923, p. 409。al-Marwazî の書は Ibn an-Nadîm, p. 150 ; Yâqût, *Irshâd*, vol. Ⅱ, 2nd ed., 1925, p. 400。as-Sarakhsî の書は Ibn an-Nadîm, p. 262。そして、al-Mas'ûdî［*Tanbîh*, p. 75］はこの as-Sarakhsî の作品を「諸道、諸国、海洋、河川、国々の情報などに関する良書」と述べる。また、Yâqût［*Mujam*, Ⅰ, pp. 177~78,179,201,254,341,399,453,553~54,571~72,864, Ⅱ, pp. 331,354,445,589,592,731~32,734,750~51, Ⅲ, pp. 33,526, Ⅳ, pp. 240,787~88,962］に見られる as-Sarakhsî からの引用を、Krachkovsky は as-Sarakhsî の『諸道と諸国』と考える［前掲書, p. 128］が、F. Rosenthal は、『諸道と諸国』ではなく、al-Mu'ta**d**id の遠征に関する *ar-Risâla*『報告』とする［前掲書, pp. 59,62~80］。なお、Ibn an-Nadîm［p. 114］に拠れば、Wakî' al-Qâ**d**î なる言辞学者に、***at-T**arîq*『街道』あるいは *an-Nawâhî*『諸地域』という、国々や諸街道の情報を含む未完成の書がある。

48) 彼は al-Ya'qûbî という名の他、Ibn Wâ**d**ih, あるいは A**h**mad b. {Abî} Ya'qûb, あるいは A**h**mad al-Kâtib という名でも知られ、没年に関しては897年説や905年説や907年説などもある。また、彼をシーア派と考えるのが通説であるが、シーア派かどうか分からないという見解［Madiouf 'Abd al-Mâlik al-Farrâ, "A Critical Edition of Kitâb al-Buldân by al-Ya'qûbî", Ph. D. thesis, University of Exeter, 1981, pp. 9~10］もある。そして、Yâqût［*Mu'jam*, Ⅰ, 222］は Ibn Wâ**d**ih がアルメニアの王たちの書記をしていたと述べるが、al-Ya'qûbî の著作には、天地創造からアッバース朝カリフ al-Mu'tamid 治世下の872年までを扱った *Ta'rîkh*『歴史』［*Ibn Wâdhih qui dicitur al-Ja'qubî, Historiae*, ed. Th. Houtsma, 2vols., Leiden, 1883］という作品―後（このⅣ）でも触れる―をはじめ、計４点の歴史書があったらしい［al-Farrâ, 前掲論文, p. 16］。

49) ed. M. J. de Goeje, BGA, vol. VII, 1892, テキスト pp. 231~373 ; ed. Mu**h**ammad **S**âdiq Âl Ba**h**r al-'Ulûm, Najaf : al-Ma**t**ba'at al-**H**aydarîya, 1952, テキスト pp. 2~126.。なお、al-Idrîsî［*Opus*, fasc. Ⅳ, 1974, p. 383］や Abû 'l-Fidâ'［*K. Taqwîm al-buldân*（前記の註14）, p. 226］や al-Qalqashandî［***S**ubh al-a'shâ fî **s**inâ'at al-inshâ'*, Cairo : Wizârat ath-Thaqâfa, vol. Ⅲ, 1963, p. 282］はこの書を『諸道と諸国』、Yâqût［*Irshâd*, Ⅱ, p. 157］は *K. Asmâ' al-buldân*『国々の名』と呼ぶ。また、執筆年に関しては、891年説もある［Dunlop, 前掲書 p. 163 ; Ahmad, 前掲書 p. 60］。

50) A. Miquel, 前掲書 p. 111

51) Maria Kowalska は、以下、Ibn al-Faqîh、Ibn Fa**d**lân、Abû Dulaf（両 *Risâla*）、al-I**st**akhrî、Ibn **H**awqal、al-Muqaddasî、al-Bakrî（*K. al-Masâlik wa'l-mamâlik*）も含めて、al-Qazwînî の『諸国の古跡と信者の情報』に見られる引用は、Yâqût の『諸国辞典』から借用されたものであると言う［"The Sources of al-Qazwînî's Âthâr al-bilâd", *Folia Orientalia*, Ⅷ, 1967, pp. 59~70］。また、Ibn ash-Shi**h**na は Ibn Shaddâd の *K. al-A'lâq al-kha**t**îra fî dhikr umarâ' ash-Shâm wa-'l-Jazîra* を通した間接的な利用であろうか［Keiko Ohta, *The History of Aleppo Known as ad-Durr al-Muntakhab by Ibn ash-Shi**h**na*, Studia Culturae Islamicae 40, Tokyo : ILCAA, 1990, p. 174］。更に、an-Nuwayrî も Mu**h**ammad b. A**h**mad at-Tamîmî（10世紀後半活躍）の *K. Jayb al-'arûs wa-ray**h**ân an-nufûs* を通した間接的な利用と考えられる［BGA, Ⅶ, pp. 364,366~70］。

52) A**h**mad al-Barqî の書は Ibn an-Nadîm［p. 221］に拠る。なお、この A**h**mad の父 Abû 'Abd Allâh Mu**h**ammad b. Khâlid al-Barqî（９世紀初期活躍）も国々の記述を含む作品を著したらしい［Ibn an-Nadîm, p. 221］。また、ad-Dînawarî の書は Ibn an-Nadîm［p. 78］に拠れば、大著であったらしい。

53) **H**amad al-Jâsir は、al-Bakrî の『難読地名辞典』中に見られるアラビア半島の範囲に関する al-**H**arbî からの長い引用がこの *K. al-Manâsik* 中の記述と同じであることなどを根拠にして、この書が

al-Harbî 作だと考える［*K. al-Manâsik wa-amâkin ṭuruq al-ḥajj wa-ma'âlim al-Jazîra*, ed. Hamad al-Jâsir, Riyadh：Dâr al-Yamâma, 1969, pp. 268~70］。

54) ed. Hamad al-Jâsir（上註53），テキスト pp. 281~657。なお、Ibn an-Nadîm［pp. 231~32］に拠れば、al-Harbî には多数の人から集めたハディース（聖伝承）に関する *K. Gharîb al-ḥadîth*―al-Bakrî が『難読地名辞典』の中で利用か―という作品ほかの著作があり、Hamad al-Jâsir は、al-Harbî の著書として、この *K. al-Manâsik* と *K. Gharîb al-ḥadîth* を含めて17作品を挙げている［上掲書, pp.221~39］。

［以下の註は次回に掲載する。］

(2000.10.13受理)